

あがつま 吾孀神社太々神楽

一 伝承地

吾孀神社は、吾妻郡中之条町大字山田(旧沢田村)、吾妻川の支流、山田川の右岸に在り、中之条町の市街地から約三キロメートルの所である、日本武尊を祭神とする神社である。なお山田は江戸時代以前から善光寺街道として行人が多く、文人墨客の多く往来した所でもある。

二 上演の時期及び場所

- (1) 上演の時期 毎年、四月八日の春祭り、九月十五日の秋祭り
- (2) 場所 吾孀神社の神楽殿

三 行事の次第、構成、演目

(1) 行事の次第 悪魔退散、五穀豊穰、家内安全、氏子の平安を祈願する神楽で、神社の祭典の終わった後に、神楽関係者、神楽師全員が神楽殿において、神主の祝詞を奉呈してお抜いの儀式を行い、神主による四方固めの舞を奉納した後、演目にしたがい、舞を奉納する。

(2) 設備、道具

神社拝殿の向って右前に、嘉永二年(一八四九) 関弥五右衛門の奉納した、太々神楽の額があがった銅板ぶきの神楽殿がある、三間四方の板敷きの舞う所の正面に神棚があり、その裏が楽屋で仕度をする所となっている。一階は一段掘りさげた休憩所と物置きとなっている。この神楽殿にしめ縄と幕をはり、正面には供物、なげ餅などを台の上に置く。カサボコの花をさげる。

(3) 役名、扮装、楽器 ①役名、②四方固めは神官、③ウズメノミコト、衣、はかま 白たび、トリカブト、鈴、三宝。④タジカラオオノミコト、白たび、水色のタツツケ、紫柄のころも、手刀男命の面、トリカブト 御幣、岩戸。⑤宇受売命、素足、タツツケ、麻の葉のころも、オカメの面、黒毛のかぶりものにかんざし、ほ

こ、すず。⑥天児屋根命 白たび、はかま、はだ色のころも、面、トリカブト、刀二本。⑦須佐之男命 白たび、青色のはかま、麻の葉のころも、面、トリカブト、中啓。⑧天照大神、白たび、はかま、紫模様のころも、面、黒毛のかぶりものに宝珠、三宝、宝珠、刀。⑨八幡大神、白たび、はかま、紫模様のころも、面、えぼし、弓、矢、鈴。⑩恵比寿、素足、赤いタツツケ、麻の葉の衣、面、えぼし、竿、鯛。⑪カッパ、素足、水色のタビつきのタツツケ、柄のシャツ、面、黒色のかぶりもの、松の枝、⑫狐、白たび、青色のタツツケ、麻の葉の衣、ネズ色面、黒毛のかぶりもの、鎌。⑬孤、白たび、赤色のタツツケ、麻の葉の衣、白い面、白毛のかぶりもの、鎌。⑭稲の穂、鈴。⑮天狗、白たび、はかま、角そでの衣、天狗面、トリカブト。⑯中啓。⑰風の神、白たび、はかま、角そでの衣、風神面、トリカブト、鈴、松の枝

楽器は 太鼓、ツツミ、笛(四本)

(4) 構成 舞い方は演目により、一〜三人、はやし方は、大太鼓、一、つづみ、一、笛、四、その他諸準備を整えたり、片づけたりする者などにより構成される。

(5) 演目 ①四方固め、②参舞、③大太刀の舞、④岩戸開き、⑤二刀の舞、⑥御田荒し、⑦弓矢の舞(八幡大神)、⑧稲荷の舞、⑨黒翁の舞、⑩恵比寿の舞、⑪白翁の舞、⑫天狗の舞(猿田彦の舞)、なお使用しない道具があるので廃絶した演目があると思われるが、わかつていない。

四 芸態

(1) 四方固め(奉幣行事) 平拍子のはやしに合わせて神主が装束をつけた姿で御幣を持ち、神前で拝礼のあと御幣を正面に高く一回あげ、次に左前に高く一回あげ、次に正面にもどし、右前高く一回あげ、正面にもどり、左前に高く一回あげ、御幣を立てて持ったまま、しゃがんで御幣を正面に上げ、しゃがんだまま、左前に立てるようにつき出し、正面にもどり、御幣を高く上げ、つぎに右前に御幣を立てるようにつき出す。終わると右まわりに正面中央に進んで正面から神楽殿の中央にて正面を向き、御幣の操作を前と同じことを行う、終わって中央正面まで進み、後ろむきになり神前に出てしゃがんで御幣を高く一回上げて神前に立てた後に、二拍二拍手一拝の礼をして終わる。

(2) 岩戸開き 笛と太鼓、のはやしに合わせて、宇受売命が、右手に鈴、左手に三宝を持って出る。神前に立ち正面を向いて両手を大きくまわしてから、はやしに合わせて鈴を振りながらまわる。左手に三宝を前に出して持ち、一回まわったら正面に向き、神楽殿の中央にしゃがみこみ、鈴を右下、右上、左上、左下とまわすように振る。これを二回くり返し正面から右へまわる。左側正面から中央にしゃがみこみ、鈴を前と同じように振り、左側から右まわりにまわる。正面から中央に出て、前と同じように鈴を振る。神前から右まわりにし、神前右すみから斜に出て中央にしゃがみ前と同じように鈴を振る。これが済むと銚を三宝ととりかえ、右まわしに大きく輪をかくようにまわしながら後へさがる。神前でひとまわしして右へまわり左正面で、両手をひろげて進むと、手刀男命が出てくる。宇受売命は楽屋へ入る。

手力男命は神前に進み、岩戸を持って、太鼓に合わせて正面中央までさがる、岩戸を高くささげて右まわり進み、神前左すみから斜に正面右すみまで岩戸を重そうに運ぶ、そこで、右手で岩戸をおさえて左手を大きく四回左上にあげる。つぎに左手で岩戸をおさえ、右手を大きく右上に四回あげる。これを二回くりかえしたあとに太鼓に合わせて後ろへさがる。この動作を四すみでくりかえす。最後に右まわりに一回まわったら、岩戸を銚に持ちかえて、体の前に横にして持ち、右前のすみから銚をかついで楽屋へ入る。(あとの舞は略す)

五 組織

中之条大字山田は、下山田、花曾根、大竹、清水、高沼の五つの集落があり、吾嬭神社の神楽、獅子舞を合わせた、吾嬭神社郷土芸能保存会が昭和五十一年に結成され、この保存継承にあたっている。春秋二回の奉納は、保存会、氏子総代、神楽師の三者で運営される。経費については当初の予算と寄附金、奉納金などでまかなわれる。

神楽師は、吾嬭神社の氏子(男子)の希望するものならだれでもなれる。年齢は中学校卒業した以上の者で特に定めていない。指導は、先輩の経験者、代表者は山口総一郎、神楽師の代表は富澤公夫である。

六 由来

記録がなく明らかなでないが、江戸末期の弘化二年に四十歳であった吾嬭神社の主であった森岡千広が一ノ宮貫前神社から習い伝えられたと云われている。

同類の神楽は、中之条町大字下沢渡、諏訪神社の神楽、同町大字五反田の親都神社の神楽である。

七 記録、文献

特になし

八 特色、所見

江戸時代も末ではあるが、山間の地に神楽を習い神に奉仕することは、信仰心も厚かったことは確かではあるが、経済的にもある程度恵まれていることが考えられる。この山田は他の地域より水田の多い所であり、人の往来も多かったこともあって経済的にも恵まれ情報も早かったことが比較的早く神楽が入ってきたと思われる。この神楽が現存する神楽をひろめた原動力となったのであろう。

(奈良 秀重)



〔吾孀神社神楽〕

おおいわ 大岩獅子舞

一 伝承地

中之条町大字上沢渡の一集落「大岩」に伝承されるこの獅子舞は、集落にある諏訪神社と大岩不動尊に奉納されるものである。この大岩の集落は中之条町市街地のほぼ西の方向約十八キロメートルの所、県道中之条草津線に沿って展開されている五十二戸の集落で、歌人、若山牧水が大正十一年に草津町から六合村を経て四万温泉に向ったときの牧水コースである。

二 上演の時期及び場所

毎年九月二十七日、諏訪神社の祭典の日に、集落の公民館で勢ぞろいして、諏訪神社まで、道中ばやしをはやしながらい列をする。社殿の一段低い所を舞う所「庭」として「ごじんじ」を奉納する。昼食の後、公民館の庭で「にわぶり」を行う。翌九月二十八日、集落から北、山よりへ約一キロメートルの所に祀つてある「大岩不動尊」の祭典に奉納する。

三 行事の次第、構成、演目、芸態等

(1) 行事の次第 ①公民館（昔は宿の伍長代の家）で仕度をし、庭に一列に並び勢ぞろいをして、天狗、サル、前獅子、花笠、中獅子、花笠、後獅子、オニ、供物、神官、笛は行列の前の方へ一人、中程に一人、後の方へ一人と云うような順序で途中道中ばやしをしながら神社まで行列をする。②社殿の一段下に設けてある「庭」で「ごじんじ」「ごしんじ、しちどう」を舞う、休んだあとに、庭ぶり（でんがら、ぬきばち）を舞い奉納する。この舞を奉納している途中に神社の祭典が執行される。③公民館へ行列なしで移動する。④昼食休憩の後、公民館の庭で、庭ぶり（⑦でんがら、①ぬきばち、②あらざり、⑤むこうへでる、④めじしがくし）を舞う。この舞を奉納して悪魔退散、五穀豊穡、家内安全、氏子の平安を祈願して奉納している。大岩不動尊への奉納は翌二十八日の縁日に行われる。約一キロメートル山よりの

境内まで道具運びあげて、お堂の境内で、ごじんじ（ごしんじ、しちどう）庭ぶり（でんがら、ぬきばち）を奉納したあと、集落へ帰り、不動尊の所有者、関家の庭で、「庭ぶり」を舞う、不動尊への奉納も、悪魔退散、五穀豊穡、家内安全、集落安穩を祈願するものである。

神社の庭で奉納する者を「シシッコ」と言い、初めての者が舞い、若い初めての者の人数が足りない時は先輩が舞う、「めじしがくし」などは先輩の者が舞うような、ならわしになっている、練習は公民館（昔は伍長代の家を宿とし飲食のまかないもその家でした）で十日間行う。初日、中日、ブツツォレエ（前日）には伍長（今は班長）が集まって酒を出す。

(2) 設備、道具 ①設備、社殿の庭の東側にある薬師堂を使って、嘉永三年にかかれた獅子の絵の幕を張り、庭の四方に青竹四本を立て、それに縄を二重に張り、その縄に「しめ」をつける。公民館の庭には何もしない。休む所は、神社では薬師堂を公民館では屋内をあてる。②道具、獅子頭（三）太鼓（三）バチなど。

(3) 役名・扮装、楽器 ⑦天狗、ころもを着てはかまをつけ、白たびに下駄をはき、天狗面をつけ、とりかぶとをかぶり、剣、うちわを持つ。①サル、じばんの上に、五三の桐と菱形の模様のついた陣羽織を着て、たっつけ、白たび、ぞうりをはき、どうらんを腰にさげ、ササラを持つ。②前獅子、中獅子、後獅子、ゆかたを着て、たっつけ、白たび、ぞうりをはき、腕になんきん手甲をつけ、獅子頭（前面にすきとうって見える「たれ」がついている）をかぶり、腰に三ツ巴の模様をかけたしめ太鼓を腹につけ、ばちを持つ。③花がさ（小学児童）じゅばんを着てズボン、白たび、ぞうりをはき、すげ笠の頂に五色の紙で作った花をつけ、そのまわりにすきとうして見える布をつけ花がさをかぶり、ササラを持つ。④オニ、じゅばんに陣羽織（サルと同じ）、たっつけ、白たび、ぞうりをはき、オニの面をかぶり、ササラを持つ。バチ、ササラには手で持つ側に五色の「ハナ」をつけ、全員が腰に五色の紙で作った「ハナ」をつける。

四 楽器

笛（三）、太鼓（腹につける） ササラ

五 歌 詞

(記録のまま) (一部略)

(1) ごじんじ初歌

- ①まいりきて すわのみたらしなかわれば 池にそりはし かもがすむ
- ②をしがもが年どしに、なにをはむやら あいのねこぐき けそのはがかり
- ③我が国は我が国は、雨がふるへそくもがたついでやもどれよ花の都へ花の都へ
- ④とうろりととうろりと、ららら、このほどはまいりきて、まいろと思ひども、橋は引きばし、とぶにとばれぬ おい
- ⑤思いもよらず朝ざりがおりて、そこでめじしをかくしとられたかくしとられた
- ⑥そなたも男じし、おれも男じし、心そろいて、めじしたずねろ
- ⑦八幡の松に松からまる、つたの木も、えんがきれば、ばらりほぐれろ
- ⑧まいりきてまいりきてこれのお庭をながむれば、こかね切石をしにはかがやく
- ⑨ししの子は、生れ落ちろとかしらふる、それを見まねにかしらふりそろ
- ⑩むかい小山に 七子竹、ふしをそろいて切りをこまかに
- ⑪このしくに、馬のり上手がござるげで、夜が夜中も、こまの足音
- ⑫あらくわを千丁そろいてものつくる、秋のたわらの、かすがしれぬぞ
- ⑬このししは、よくもあしくも、をほめやれ、ことしはじめてならいいでそろ

六 演目、芸態

- (1) 演目 ①ごじんじ (神前ぶり) ②ごじんじ、③しちどう、④庭ぶり ⑤でんがら、⑥ぬきばち、⑦あらざり、⑧むこうへでる、⑨けだし、⑩めじしがくし
- (2) 芸態 獅子は、前獅子(雄) 中獅子(雌) 後獅子(雄) が、笛のはやしに合わせて、腹につけた太鼓をたたき、首をふったり、足をふんばったり、しゃがんだり、片足で立ってはねたり、腕を高くあげたり、とびはねたり、することを組み合わせた舞で文字で書きあらわすことは到底不可能なことであり、獅子を舞っている者も、子どもの時から舞を見たり、笛のはやしを聞いたたり、時には何らかの役に参加したりして自然に覚えられるものといっている。他村から成人になって養子など

で来た人は舞えた人はいないという、また舞の意味も「ごじんじ」は神前で舞うもの「めじしがくし」二ひきの雄獅子が雌獅子を自分のものにしてしようと奪いあう舞である。また「しちどう」は社殿やお堂のまわりを七回まわるもの、この三つのほかはわかつていない。ただ先輩に教えてもらって舞っているというものである。ただ「ごじんじ」の場合、①はじめの舞(同じ動作(以下同じ)を六回する、②ぶつちめ(三三)、③ごじんじ(三三回)、④こぎり(二回)、⑤ツーンテン(三三回)で終わり。「しちどう」は、①はじめの舞(二回)、②しちどう(七回まわり)、③こぎり(二回)、④ツーンテン(三三回)終わり。「でんがら」「あらざり」「むこうへでる」は、①はじめの舞(三三回)②ぶつちめ(三三回)③でんがら、ぬきばち、むこうへでる(三三回)③こぎり(二回)④ツーンテン(三三回)である。〇めじしがくしは、①はじめの舞、②とうろり、③しゃらしゃん、③はをかえし、④しゃらしゃん、⑤ぶつばなし、6しゃらしゃん、⑥ツーンテン、終り、このようになる。

天狗は、公民館から神社までの道中案内の役割りをはたし、「ごじんじ」の時も、庭ぶりの時も、舞の輪の外側に立っているだけである。「サル」と「オニ」は、若い者がつとめる。獅子の舞いぶりに合わせて、似たような動作をし、「ササラ」をすりならして、舞をたすける。「ハナガサ」は小学生がつとめる、公民館から神社までの道中に花を添えるとともに獅子舞に親しませるように配慮されている。神前の「ごじんじ」の時は、社殿ののぼり口に二人で社殿の方を向いて、はやしに合せて「ササラ」をすりならしている。公民館の庭では庭へ出ない。

七 組 織

大岩は、中之条町沢田地区の第五区である。年度当初の区総会で、獅子舞の役員が決められる。祭典と獅子舞は、区の役員と獅子舞の役員、係によって運営される。獅子舞の出演者は役員で選定されるのであるが、中学校卒業後大岩に居住する男子は全員獅子舞を習わなければならない風習になっているので、男子ならばだれでも選ばれば舞えるようになっていく。区長は関 弘、獅子舞保存会は黒岩宗彦。

八 由来及び付近の類似芸能

今から三百年から四百年ぐらい前のものといわれている。獅子舞に使う幕に嘉永三年（一八五〇）の墨書銘がある。それ以前から使われている幕も存在する。

類似の獅子舞は同じ大字上沢渡の反下獅子舞は大岩で教えたものといわれる。

九 記録、文献

残されていない。

一〇 特色、所見

この獅子舞は、勇壮そのものである。頭かしらが大きく、動きが大きく、敏捷で誰が見てもすばらしい一語につきるほどである。頭かしらが重いので演目を二つぐらいで交替しなければならぬので、昔から出入のはげしいことを大岩の獅子のようだとされている。見るものに感動を与えるこの舞は他に類例を見ないと言っても過言ではないと思われる。また保存会の組織についても昔からの伝統をよく守り、集落全体がひとかたまりになっている姿は誠に立派なものである。

（奈良 秀重）



〔大岩獅子舞〕

あらまき 新巻の太々神楽

一 伝承地

吾妻郡東村大字新巻あらまき二二九六 菅原神社に伝わる。社の所在地は主要地方道渋川吾妻線の新巻信号より南方およそ三〇〇メートル、一五〇の石段を登る。境内には諏訪神社のほか石詞、石碑が多くあり、宝物に「石槌」がある。

二 上演の時期及場所

祭典は三月二十五日と九月二十九日 菅原神社の創建は不詳。昭和十年に本殿、拜殿は新築、神楽殿は同三十四年伊勢湾台風によって倒壊し、氏子一同の浄財寄進によって翌年改築される。床の高さおよそ一・四メートル、見物するのに好都合といえる。

三 行事の次第、構成、演目、芸態等

(1) 祭礼行事の次第 五穀豊穡、家内安全の祈禱を主とする神楽舞で、昔は練習は世話人宅で行ったが、今は公民館を使用する。祭典当日は九時に集合して衣裳なおしや諸道具の準備にあたる。式典は午前十時、午前は岩戸前までの九座、午後は十六座までで四時頃終了する。

(2) 設備、道具 神楽殿は昭和三十五年に新築し、間口二間、奥行三間、朱塗りの勾欄付き回縁である。屋根は瓦葺。道具は昭和八年十月、東京市日本橋区小伝馬町高田善七商店より神楽の面、装束を購入、時の総計費二六〇円とある。最近、「あがしん地域文化振興基金」の助成をうけ補修する。

①冠類としては冠二 烏帽子二 毛頭二 烏かぶと二 冠天若彦用天冠一 風折烏帽子一

②神楽面としては龍王頭面、国常立命 大刀男之尊 翁(児屋根之命) 白面 翁(酒造神) 黒面 素佐之男命 白狐面 恵比須尊 女神(伊佐那美命) 猿田彦大神 種時之神 荒神 金山彦命 天若彦命 宇須女命 馬鹿面(ヒョットコ)

河童面 青面 姫面 金山向打 伊佐那岐之命

(3) 役者、扮装、楽器 楽器としては大太鼓一、小太鼓一 横笛三 囃子は三ツ拍子、四ツ拍子などである。装束は猿田彦用狩衣袴、翁用黒地狩袴、老神用青地狩衣袴、千早、龍王衣で、その他は桐生の織元より原料を購入し、昭和八年装束の仕立ては八十三歳になる一場は外二十名の高齢者が奉仕したと記されている。その外大刀二振、水引き幕一張、笏二、耳飾一、鈴二、中啓 この時の会計は発起人者負担二三六円八九銭、寄附金一八〇円一〇銭とある。前述した如く補修は行う。

(4) 歌詞

○国常之尊

「天が下 雲の上悪鬼悪鬼 いざや払わん。」

○天若彦之命 第一の矢を放つ時

「千早ふる社に 弦かけて射る 矢の先きに 悪魔たまらじ。」

第二の矢を放つ時

「梓弓 真弓月弓ひき寄せて 放てば残る雲霧もなし。」

(5) 演目、芸態 舞座は六座であるが、一三の「稻刈の狐」は廃絶

| 舞座 | 冠りもの | 面 | 採物 | 装束 |
|-------------------|---------------|--------------|----------------|-------------------|
| 一 神楽式 | 冠 | なし | 笏、奉幣、祝詞 | 装束 袴 |
| 二 国常立尊 | 烏かぶと | 国常立尊 | 刀 | 錦 錦ゴザ袴 |
| 三 児屋根之命 (春日大神) | 烏かぶと | 児屋根命 | 刀 鈴 | 青錦 青錦ゴザ袴 |
| 四 伊佐那岐 伊佐奈美之命 | 冠 琮珞 | 伊佐那岐 伊佐奈美 | 鉾 中啓 | 青 青袴 白チャンチャン緋袴 |
| 五 鏡磨之神 | 烏帽子 | 翁 | | 紫儒袴 紫ゴザ袴 |
| 六 金山彦之命(鍛冶屋) | 風折烏帽子 烏かぶと | 金山彦 金山向折 | 金槌(小) 金槌(大) | 青 青袴 紫 紫袴 |
| 七 白狐 | 毛頭 宝珠 | 白狐 | 鉞 | 白 股引 |
| 八 種時之命(地神様) | 烏帽子 赤烏かぶと | 種、時 | 三宝 中啓 | 黄 黄袴 紫 紫袴 |

| | | | | |
|------------------------|----------------------|---------------------|----------------------------|----------------------------|
| 九 岩戸前 宇須女命 太刀男之命 | 毛頭 鉢巻 烏帽子 | おかめ 太刀男 | 鉾・鈴 岩戸 | 白 緋袴 錦 ゴザ袴 |
| 二 天若彦之命 (八幡様) | 冠垂綏懸緒 鳥かぶと | 天若彦命 天狗 | 弓 矢二本 | 空色 空色袴 |
| 三 三神劍 | 鳥かぶと 鳥かぶと 鳥かぶと | なし なし なし | 竹光の刀 鈴 竹光の刀 鈴 竹光の刀 鈴 | 黄 黄袴 青 青袴 白 緋袴 |
| 四 玉造之神 | 鳥かぶと 鳥かぶと | 黒面 稲田姫 | 中啓 | 白 緋袴 錦タスキ錦ゴザ袴 |
| 五 稲田姫大蛇退治 | 鳥かぶと 毛頭 宝珠 | 須佐之男 竜王頭 | 刀 二振 宝珠 | 錦 錦ゴザ袴 竜王衣 股引 |
| 六 蛭子之舞 | 手拭 烏帽子 毛頭 | ヒョットコ エビス カッパ | 扇 釣竿 | 白 股引 白赤のタスキ 緋袴 黒袴 股引 |

三人劍(さんてやのつるぎ)を紹介。三人が劍と鈴、タスキ姿で登場し、各自劍の先端をもって輪をつくり、曲にあわせて三人が交互に劍を飛びこえ、またくぐるなどたくみにあやつる姿は技術をようする技であり、真剣そのものである。観客も息をつかずに見入っている。

四 組 織

太々神楽の講中は、明治四十二年十一月に一二戸で「神巻貯蓄組合」を結成し、存続のため親子で講に入り、世襲的に受けつがれ、現在は三代ないし四代にあたる。記録は詳細に保存されている。保存会長奥木 保、神楽士は次の通り、()は舞座富沢義一(神楽式 金山彦之神 種時之神 稲田姫) 奥木常治(神楽式 種時之神) 奥木貴徳(国常之尊 三人劍) 奥木正美(児屋根之尊 伊佐那美之命 三人劍 蛭子の舞) 奥木真次(伊佐那岐) 飯塚 友(鏡磨之神 玉造之神 蛭子之神) 奥木力雄(金山彦之神 稲田姫) 飯塚 要(白狐) 塩谷光昭(岩戸の舞) 奥木利一(天若彦の命) 奥木雅和(三人劍 岩戸の舞) 飯塚恵喜(稲田姫) 富沢誠一(神楽式 猿田彦之命 蛭子之神) 奥木 保(大蛇)

五 由来及び附近類似芸能

菅原神社に「文化財新巻太々御神楽創立八十周年記念」の奉額がありそれを記す。新巻太々御神楽は其の昔木曾御嶽山の講中よりはじまると言い伝ふ。文化七十年及明治十九戌年に建立された御嶽社を菅原神社境内に祀る。その講中に加盟した人達が修行により資格を得て神楽士となり御神楽を奏する習しであった。明治三十年此の信心篤き同志によつて新巻太々御神楽が創立されたのである。当時は神楽殿も仮舞台をつくり装束一切も植栗の鹿島宮より借用し、太々御神楽の奏上は太々連中の奉仕によつて行はれた。大正五年太々連中の発起により氏子一同の協力を得て神楽殿が新築され、昭和八年太々御神楽の装束一式新調此の代金四百二十二円九十銭、昭和十年中之条町樋田藤重郎翁より舞の教えをうける。以下略

類似神楽は隣接の吾妻町深沢御嶽神社の神楽は、明治三十年頃植栗の齋神官を招いて教わる。また郷原の関庄八は、青梅市の御嶽神社の神楽を修得し豊穂教会講社大講長となつて、大正五年より菅原・榛名・鳥頭神社等に伝授し、継続されている。

六 記録文献

『あずま村誌』 東村役場 昭和四十年版
『東村の文化財』 東村教育委員会

七 特色・所見

天下泰平 五穀豊穰 家内安全を奉納する神楽は、先輩から後輩へ引継がれ今日にいたり、昭和四十六・四十七年に県民芸術文化祭に出演、さらに同五十七年伊勢神宮において国常立之尊、天児屋根之命、猿田彦之命の三座を奉献する。伝統九十年此の感銘を同行した三十余名によつて境内に「伊勢神宮太々御神楽奉納記念碑」が建立される。同四十八年に村指定無形文化財となり、鎮守の森から流れてる笛、太鼓の音は郷愁をそそぐ。祖先から継承された文化を次の世代へ、いつまでも伝統の灯を守ってほしい。(丸山不二夫)

○翁の間答 神の由来 東村新巻の神楽

天津姫の詞 (内)

とうくとまゆり立ちたる翁こそいかなる神にてや候

手那槌足那槌の詞 (外)

われこそは手那槌足那槌の命にて候さればわれを訪ぬるは如何なる姫にて候や

天津姫の詞

われこそは天津姫にて候手那槌足那槌の神にて候へば神楽の由来語りてや候

手那槌足那槌の命の詞

そもく神楽と申するは天照大神の御弟に須佐男の命の御心志荒々しきをよきにあらざと
天の岩屋に入り給いしを原に葺原の国とこやみとなり給い天を行く鳥地に落ち地を行くけ
をの山野にまよい諸々の神たちおく処なく天の岩屋の前にツドひ青にぎて白にぎてを立て
庭の栄火に鶏りを集め天之宇須女の命をたじいし給ふにぞ此原に葺原の国常やみならんと、
天刀原の命岩戸を開けて引きはなち信濃の国水内郡ようかい山へと帰らせ申うす、その時
より神楽のことを伝へてや候

天津姫の詞

目出度かり候

一同にて

あな面白の御神よな



兎屋根之命



国常立尊



国常立尊



伊佐那岐、伊佐奈美之命



三人 劔



伊佐奈美之命

大宮巖鼓神社太々神楽

一 伝承地

吾妻郡吾妻町大字原町の大宮巖鼓神社に伝わる。通称大宮神社と呼ばれ、県指定重要文化財の「巖手刀」を所有する。社は町役場、JR群馬原町駅の北東に位置し原町幼稚園・小学校・中学校が隣接している。

二 上演の時期及び場所

祭日は五月五日と九月九日。太々神楽は本殿南側の神楽殿で奉納。現在の神楽殿は、昭和四十二年明治百年を記念して新築される。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 祭典当日の朝、拜殿前の参道に萬民豊樂、五穀豊饒、家内安全、天下泰平と書かれた大きなアンドンが立ちならぶ、これは神社周辺の上野、在下地区の人たちの受持となっている。

装束、諸道具は社務所に所蔵されている。神楽師は午前九時頃より衣裳なおしや諸道具の準備にあたる。神楽殿にある神座のお祓いの後、午前に六座、午後は一時より本殿において祭典儀式が行われるために中断し、終了後七座から十二座まで舞納して三時半頃終了する。

(2) 設備・道具 神楽殿は昭和四二年に新築され、間口二間、奥行四間、朱塗り勾欄付き回縁である。二階部分が舞台のため遠方からも眺められる。三面は戸をなく見通しができ一方に神座を設ける。三面に幔幕をつける。

(3) 役者・扮装・楽器 面は十四ある。翁二、男六、女二、狐二、恵比寿一、天狗一で、天狗は昭和十一年に装束と一緒に購入しているが、他の面については昔からのもので、購入年代、作者も不明である。なお同二十年に塗り替える。装束は同十一年以後もいくつかは購入している。

囃子は平拍子、三つ拍子、四つ拍子、変り拍子等で、囃子方は神楽師が交替で奏

する。楽器は大つづみ(大革)一、大太鼓(大胴)一、横笛一〜二である。大つづみは現在縦に据えて打っているが、昭和の初期は横に据えて打っていたという。横に据えて打つのは貫前神社の特色の一つで、神楽は貫前神社から習ったと先輩から聞いているという。

(4) 歌詞 なし

(5) 演目 芸態の演目は一曲一形式で、舞座数は一二座である。

| 舞座 | 冠りもの | 面 | 採物 | 装束 |
|------------|------------------|-------------|--------------|------------------|
| 一 奉幣 | 烏帽子 | なし | 笏 | 白 |
| 二 参舞 | 烏帽子 | 男 | 三宝・鈴 | 赤錦・赤錦袴 |
| 三 大刀翁の舞 | 黒の烏かぶと | 翁 | 大刀・白紙 | 薄黄 白袴 |
| 四 八幡大神の舞 | 侍烏帽子 | 男 | 弓・矢二本 | 青緑・青緑袴 |
| 五 岩戸の舞 | 金の冠 黒の烏かぶと | 女(おかめ) 男 | 鉾・鈴 神・大刀 | 緋の着物 黒錦・黒錦袴 |
| 六 扇の舞 | 烏帽子 | 翁 | 扇・鈴 | 白 白袴 |
| 七 神田荒の舞 | 烏帽子 赤の烏かぶと | 女 男 | 三宝・中啓 神・面 | 黄緑 緋袴 赤錦・赤錦袴 |
| 八 二刀の舞 | 黒の烏かぶと | 男 | 刀二本 | 黒錦・緋袴 |
| 九 種蒔の舞 | 黒の烏かぶと | 翁 | 三宝・中啓 | 白 白袴 |
| 一〇 稻荷大神の舞 | 宝珠 | 牡狐 牝狐 | 鉤 鎌・稻穂 | 薄緑・薄緑袴 薄緑・緋袴 |
| 一一 恵比寿の舞 | 烏帽子 | 恵比寿 | 釣竿・三宝・鯛 | 青錦・青錦袴 |
| 一二 猿田彦大神の舞 | 赤の烏かぶと 黒の烏かぶと | 天狗 男 | 鉾・中啓 神・鈴 | 赤錦・赤錦袴 黒錦・黒錦袴 |

履物は、恵比寿の舞のはだしの外はすべて白足袋をもちいる。岩戸の舞・神田荒の舞・猿田彦大神の舞の三回は、御神田で収穫された餅米で作った餅が賑かな変り拍子(馬鹿囃子)によって投げられる。

② 芸態 一曲一座形式で、一座は十〜十五分程である。一〜二座を紹介すると神田荒の舞、俗に「地神さん」と呼ばれて親しまれる。地神が三宝と中啓をもち

種蒔をする。途中で悪神が神の枝を持ってあらわれ、種を蒔くあとから掃き捨ててしまう。地神は悪神に気づき、舞台一っぱいに逃げまよう悪神を刀で威す。ついで宝珠や鏡を見せ、悪神が改心して善に帰り面を恵比寿に換える。地神は退場し、その間に善神となって舞う。最後は地神と一緒に餅をなげる。

岩戸の舞 岩戸神楽という名のとおり里神楽の中でも代表的なものである。天照大神が岩戸の中に隠れてしまつて世は暗黒となり、あらゆる悪いことが湧き起り困りはてた神々は相談しているところに黒髪に鉢巻き、金の冠をかぶった巫女の姿をしたオカメこと天鈿女命が袖無しあまのつゆめの緋の着物を着て、鉾と鈴を持って登場し岩戸の前で舞う。そこへ天手力雄命あまのぢからおが黒錦の装束にタスキをかけて登場して岩戸を開き日の神を拝む。この間オカメは退場し、天手力雄命は岩戸を力一っぱい持ちあげて舞う。その後一緒に餅投げをする。

四 組織

昔から神社所在の在下地区の男子で保存会が結成され、伝習方法は先輩が後輩を指導することになっておつて、祭りの十日程前から練習に入る。

保存会は神楽師で構成される。(括弧内は担当する舞)

塩谷昭夫 会の代表者(奉幣 大力翁の舞 岩戸の舞の男) 上原静男(神田荒の舞の女) 高山 登(八幡大神の舞 稲荷大神の舞の牡狐、恵比寿の舞) 青木庄一(種蒔の舞 猿田彦大神の舞の男) 高山 治(神田荒の舞の男 稲荷大神の舞の牝狐 猿田彦の舞の天狗) 小池邦光(二刀の舞) 関崎岩夫(参舞 岩戸の舞の女) 石坂賢一(扇の舞) 以上八名が神楽師である。

五 由来及び付近類似芸能

神楽の奉納は、いつ頃から始まつたものかわかるような文献は見つかっていない。ただ、現在の神楽殿は昭和四十二年に明治百年を記念して新築したもので、旧神楽殿の格天井に立派な花鳥の絵が描かれていた。在下の上原政枝家に「神楽殿は文政四年(一八二二)に建てられたものであり、舞台の格天井の絵は先祖が奉納したものである」という言い伝えがある。(絵は神社に保存)この伝承によれば、文政四年

から昭和四十二年のおよそ百五十年間、大勢の氏子等が畏敬の念をもって見守るなか神楽が奉納されてきたことになる。系統のことはわからない。

現在の神楽については、神社に永年奉仕した小池源八氏(天保十四、昭和十七年百才で没す)の長寿を祝つて建てられた小池源八翁寿碑の文中に「我が郷土に里神楽と称するものあり翁その漸次頽廃せんとするを嘆き率先してこれが改善復興を図りその今日あるもの実に翁の力なりとす」と記されている。

『中之条町の郷土芸能』には高山茂樹(大宮巖鼓神社の宮司 天保六、明治二十九年)が、中之条町吾孀神社の神官森岡千広を貫前神社へ神楽修業にやつた記事、また小池源八の孫にあたる鳥一郎も貫前神社から習つたと先輩から聞いている。以上のことから神楽の頽廃、貫前神社での修業、改善復興されたものが現在の神楽であると思う。貫前神社神楽の系譜については、群馬県神社庁編『群馬の神事』に「貫前神社の神楽は、その縁由詳かでないが、往古出雲大社の社家より習得せるものと伝えられている」と記されている。

六 記録

『吾妻町の民俗芸能』 吾妻町教育委員会 平成四年三月版

七 特色・所見

昭和四十六年、県民芸術文化祭に町代表として出演する。先人たちの残された文化遺産の貴重なことと、人びとの生活の歩みの力強さ、確かさというものを知ることができた。地域に生まれ育ち、この祭礼の時とばかりに輝く伝統の美しさを多くの人々に示すことにより、いつまでもいつまでも発展することは、ふるさとに生きる誇りともなる。是非とも祖先から継承された文化を、次の世代へ伝えていってほしい。

(丸山不二夫)



猿田彦大神の舞



二刀の舞



稻荷大神の舞



岩戸の舞



神田荒の舞

まつや 松谷ささら師子舞

一 伝承地

吾妻郡吾妻町大字松谷の松谷神社に伝わる。社を土地の人は荒神様と呼んで親しまれている。吾妻町の西端で、国道一四五号線沿いに位置し、すぐ西方に国指定名勝の「吾妻峡」がある。現在話題になっている建設省八ッ場ダム建設関連事業としての国道・JR等の付け替えによつては、今後大きく変貌しようとしている。

二 上演の時期及び場所

祭日は三月十五日と十一月二十三日、師子舞は御殿師子と呼ばれ、道中の舞となつてすべて舞台の上で演じられる。いつの頃からか「師子」という文字を使用し獅子と書かない習慣があり、その伝統を尊重して師子の字面を用いている。神楽殿の東に隣接して、もうひとつの古い舞台があり、見る人を迷わせるが、これは以前村の若い衆が八木節を上演する舞台で、師子舞にも神楽にも無関係だということである。

三 行事の次第・構成・演目・芸能等

(1) 祭礼行事全体の次第 舞の系統は判官流と称せられる。楽器の中に鼧を用いるので「ささら師子舞」と呼ばれているが、「ささら」を用いるのは特に珍しい例とはいえない。祭典当日保存会役員は午前十時より、衣裳なおしや諸道具の準備にあたる。午後一時より約一時間、五穀豊穰・家内安全・厄除祈禱をこめて奉納される。なお祭典行事は、師子舞終了後の二時頃より行われる。

(2) 設備・道具 神楽殿は二間四面の舞台に一間半の楽屋がついて、建坪は七坪で、朱塗りの勾欄付き回縁である。明治四十年（一九〇七）神社合併の際、余材を利用して作られたという。昭和五十一年と平成二年に修繕増築が行われた。

(3) 役者・扮装・楽器 師子は桶胴型の太鼓を腹に着け、これを桐材で作ったこけし型の桴で打つ。花笠のこどもは左手に鼧を持ち、右手に鼧を持つ。楽器は師

子の腹に着けた太鼓と、花笠のこどもの鼧に笛が加わる。鼧は太い竹を二つに割つたものに波形の刻み目をつけた鼧子と、細い竹の一端を細く割つた鼧とがセットになつており、これをこすり合わせて音を出す。田楽などで用いられる編木（びんざさら）は使われていない。師子歌の中にも「ささらをば今年始めて習い出候」という文句がある。

(4) 歌詞 やすみ くるい ほつぼうの三通りの歌がある。
やすみ

①この宮に 金の柱が四本立ち 中に黄金の御幣が御座候

②師子の子は 京で生まれて伊勢育ち 腰に添えたが伊勢のお祓い

③ささらをば 今年始めて習い出候

④この宿に 馬乗り上手がござるげな 夜が夜中も駒の足音

くるい

①思いもよらず 朝霧がおおりて これのお庭で牝師子を隠し取られた

②なんぼ牝師子が隠れても これのお庭で見つけ出すもの（見つけ出すもの）

③牝師子牝師子のふりをめさる 縫れつぼぐれつ 余念もないもの（余念もないもの）

④松に絡まる鳶の葉は 縁がなければ ほろり解れる（ほろり解れる）

ほつぼう

①向い小山の七子竹の 節をそろえて きりをこまかに（きりをこまかに）

②山雀が 山にはなれて里へおおりて これのお庭で羽を休める（羽を休める）

③師子の子は 生まれ落ちると頭振り候（頭振り候）

④白鷺が 海のはばたへ巣を掛けて 波に揺られて ぱと立ち候（ぱと立ち候）

⑤我が国は 雨の降るげな 雲が立つ いざや戻れよ 花の都へ（花の都へ）

(5) 演目・芸能 ①演目 師子は一人立ちで三頭（先・中・後師子）、いずれも竜頭型のキャップ式、色紙を御幣のように切つたものを付けて背に垂らす。演者はす

べて少年で、中学生の三人が師子頭を着け、三人の小学生が花笠をかぶり、ささらをもつてその間に一人ずつ入り、輪になつて舞う。囃子方はすべて神楽の囃子を勤める成人が分担しており、数人の笛方と数人の歌方とに分かれる。そして太鼓・鼧

が合体して典雅雄壮な伝統芸能の舞が演じられる。

②芸能・曲目の順序

- 一、渡りびょうし 二、おかざき 三、ぎんぎやく
 - 四、しゃぎり 五、渡りびょうし 六、島おかざき
 - 七、でき 八、やすみ(歌) 九、しゃぎり
 - 一〇、渡りびょうし 一一、さがりは 一二、くるい(歌) 一三、しゃぎり
 - 一四、ほつぼう(歌) 一五、かたばち 一六、しゃぎり
- 舞の中に歌の入るところが三カ所ある。舞の中の「しゃぎりの舞」いに吹奏する笛の曲は『やたらばやし』といい、宮内庁雅楽にも用いられ、県下に類例をみない曲であるともいわれている。

師子頭は竜頭型で、勢多郡花輪村(今の東村大字花輪)の名工星野万之助(天明寛政ごろの人)の製作で、代金は二分式朱と記録されている。星野万之助は旧姓を高瀬といい、彼の遺作は郡内の社寺にもところどころに見られるが、特に吾妻町岩下の応永寺山門や本堂の彫刻は広く人の知るところである。この師子頭は、昭和三十三年には群馬県立博物館の獅子頭特別展に出品され、館長の表彰を受けた。その翌三十四年、明治神宮及び靖国神社に舞を奉納するに当たり、師子頭を塗り替え衣裳を新調し、楽器の類に至るまで新調、または塗り替えを行ったので、まったく面目を一新するに至っている。

四 組織

保存会は太々神楽と共通で、松谷神社氏子役員会と師子太々神楽会から成り立っている。その連名は、一、氏子役員会、①氏子総代、②祭典世話役、二、師子太々神楽会、①顧問、②会長、③副会長、④世話人、⑤会員、会長は水出茂利計、親師子をつとめる中学生は卒業後は退き、また髻を擽る子は成長していく為に後輩の指導は大変なことである。特に少子化の現在、松谷地区一円より広く人材を募り、練習は指導者と振子は共に一体となって汗を流し真剣そのものである。

親師子 日野 義久 水出 忍 水出 佑也
佐々良 水出 匡人 竹淵 慎一 小池 惇史

通例師子は社師子、牝師子と呼ぶ事が多いが、この神社では「親師子」という呼び方をしている。これは花笠をかぶり、髻(佐々良とも記す)を擽る子を将来成長して師子になる子師子に見立てているのかも知れない。

五 由来及び付近の類似芸能

水出幾男氏所蔵の寛政二年(一七八九)の古文書によると、この師子舞の由来は「昔からこの村の諏訪の森で師子舞が行われていたが、およそ六十年ほど前(この文書の書かれた寛政二年から逆算して享保十五年ごろ)に凶作の年があつて中断し、その後成年(寛保二年)の出水や、宝暦十一年(一七六一)の火災などのために長い間中断していた。」としてあり、それを寛政二年九月にいたつて再興したものである。

六 記録文献

『吾妻町の文化財』 吾妻町教育委員会 昭和六十年三月版
『吾妻町の民俗芸能』 吾妻町教育委員会 平成四年三月版

七 特色・所見

昭和四十七年三月一日 吾妻町指定重要文化財となる。この師子舞は、同二十九年には郡代表として護国神社に、また同三十四年には県代表として靖国神社・明治神宮等に奉納された事もあつて、民俗芸能としての優秀性は早くから知られている。特に同四十一年十一月には第十五回青年大会郷土芸能の部において優秀賞を受け、文部大臣表彰。平成五年伊勢神宮第六十一回式年遷宮芸能奉賛記念行事に要請をうけ、内宮、外宮にて師子舞を奉納する。郷土芸能は私たちが遠い祖先から受けついで文化遺産であり、それは人々のよろこびやかなしみ、神々への祈りや感謝の心の表出である。貴重な遺産が今なお心のふるさととして脈々として生き続き、立派に伝承されていることに喜びと誇りを感じると共にいつまでも願う。

(丸山不二夫)



獅子舞 ささらが入る



獅子頭



獅子舞



伊勢神宮奉納記念



獅子舞

よきやようさん 与喜屋養蚕神社太々神楽

一 伝承地

現行の吾妻郡長野原町与喜屋の神楽は「御獄流岩戸神楽」と称し、明治三十年頃、吾妻町の岩下の菅原神社神楽師から伝授されたものというが、当神社の神楽はこれ以前からあり、その創始は明治二十五年頃、村の大先覚者萩原秋水翁が発起人となつて、小泉利作、萩原捨五郎、篠原親、篠原佐一郎氏と協力して始められたという。

この頃の当社の神官は吾妻町の須賀尾の渡辺駿河守という人で、その持神楽は「国堅天孫降臨より天の岩戸を経て、歌聖住吉大神に至るまでを、十二座にまとめた優雅な舞であったという。」その神楽にも推移があり昭和三十年頃に、岩下菅原神社神官の海野恭齊氏らによつて、菅原神社の御獄流神楽が改めて伝えられている。

二 上演の時期及び場所

上演の時期は毎年五月十五日の養蚕神社の大祭日に、神楽殿で演じられている。神楽殿（舞台面二間×二間）は最初の頃、丸太材に縄からげの仮神楽殿で行っていたが、村の信仰者の協力で作ることにになり、その時は純農村で経済力に乏しかったので、建築材料持ち寄り、越後出身の宮大工奥七の指導で、大工から屋根葺きまで一切信従の労力奉仕で完成した。特に終戦後農林省が食糧増産のため、国有林を解放する時、農林省から百ヘクタールの解放に成功して、地上立木の利益金より二十万円を出資して、神楽殿の屋根を銅板葺にして現在に至っている。

衣裳類は以前は菅原神社から借用していたが、昭和五十一年頃、町の補助金で、東京の浅草から購入し現在に至っている。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

神事のあと御神楽になるが、次の様な次第で行われる。

第一座 国常立之尊（持物一口伝あり） 第二座 天之児屋根尊（太刀） 第三座 天之間一津尊（剣・小槌） 大戸道之尊（何槌） 第四座 石凝姥之尊（鏡・笹） 第五

座 保食尊、倉稻魂尊（三方） 素盞鳴尊（神） 第六座 天之児屋根尊、天宇受売尊（鉾・鈴） 第七座 三人劔（太刀三本） 第八座 本多別之尊（弓矢） 第九座 瓊々杵之尊（中啓、開いた扇） 木花開耶姫尊（太刀） 岩長姫之尊（赤扇二本） 第十座 蛭子尊、悪神（釣竿、神） 第十一座 猿田彦之尊（鉾、中啓） 天若彦之尊（弓矢） 問答あり、第十二座 大山祇尊、素盞鳴尊（かい、太刀、中啓） 稲田姫之尊、八幡尾呂知（剣、赤扇） 第十三座 経津主尊（鉾） 武甕槌之尊（太刀） 第十四座 天之児屋根之尊（神、鏡、剣） 市杵島姫之尊（ひさご） 問答あり 第十五座 猿田彦之尊（鉾、中啓） 天若彦之尊（問答あり）

以上の通りであるが、現行は次にあげる九座が上演されている。

第一座 国堅女国の常立神と申し、未だ日本の国が浄脂の如く漂っていたなかに残つて地となった神様で国土を切り開く神にして四方八方を切り開き国を定めた神人間が無事生活できるようにした国土の守護神。

第二座 児屋根、天之岩屋戸に天照大神様が隠れたまいし時、言辞美しく、祝詞を岩戸の前にて奏したる神にして言綾根（ことあやね）とも申す、永く皇祚をお守り祭祀を司る神様にして祭りを行う神。

第三座 鏡研ぎ、石凝姥之尊、高皇産（たかみすすび）の神命に依り天之香久山の金を取り、天之岩屋戸の前にかけた鏡を造り給う神にして鏡を研ぐ行事を行う。後に金物を造る神となる。

第四座 稲荷、保食の神にして食物を主宰し給う神、後に狐と化して田畑を作る動作をする。

第五座 地鎮様、土地の神である天之児屋根之尊が稲荷の神の耕した畑に種子を播く、時には悪神（嵐）が出て、地鎮様のまいた土地を荒してしまふ事もある。然し地鎮様のお諭しによつて悪神も改心して増産に協力するようになる。

第六座 岩戸 天之宇豆女尊、天之手力雄尊、天照大神が素盞鳴尊のいたずらにあきれて、天之岩戸に籠つてしまったことにより天下が乱れ作物もとれなく、世間中の神々が困り岩戸の前にあつまり相談した。その時に天之宇豆女尊が舞を舞い振わした（これが神楽の始め）そのため岩戸の中の天照大神が訝り、岩戸を少しあけて覗見した。その少し開いた戸を力の強い天之手力雄尊が、岩戸を開き、天照をお

導き連れ出した。その時より五穀が実り平和な天下になった。

第七座 恵比寿、蛭子の尊と申す不具の子、骨なしの子なので草船で流してしまつた。これは伊弉冉尊が伊弉諾之尊と会合の時に女神である伊弉冉尊が先に口にしたので不具の子が生れた。蛭子は海に流されたので海で漁をして暮らしていた。魚とも天照大神にも献上している。然し時には海にも悪神（嵐）があり漁の邪魔をすることもある。

第八座 猿田彦之尊、猿田彦之尊は天照大神が天よりお降りになったとき道案内をした神、天若彦之尊は天照大神の使いで出雲の国に向き出雲の国を天照大神にお返しする様に交渉した神、共に道案内をした神。

第九座 天之児屋根尊、市杵島姫尊、天之児屋根尊は杵鏡劔をもって出る。市杵島姫（商売繁盛の神、世の中を盛にする神）はひさごを持って出る。生活に一番必要なものを作り塩を作ること、二人協同して作業すれば天下泰平なり依つて目出たし、目出たし。

◎行事全体の順序 神事のあと、第一座から上演し、中食の時間を取り、午後四時頃終わる。練習については、神楽保存会の会議をして、五月七日から一週間の夜をあてる。

◎神楽師の構成と組織

保存会は二十九名が、登録されていて、毎年二、三人位の補充をしながら、年配の人は顧問となり後進の指導にあたる。役割については会員が相談して決める。そして何年か続ける。因みに平成八年度の後見人、篠原旭、浦野吉一、山口達夫、天野芳秋、舞（太鼓）天野弘之、篠原一彦、矢野喜八郎、丸山茂、浦野照男、丸山利久、塩野敏幸、桜井浩一、唐沢博、篠原三代治、萩原伸一、丸山実司、篠原進、萩原邦治、笛は、矢野環、萩原省三、丸山利久、清水敏男、篠原明、矢野公康、萩原邦俊、丸山武徳があたっている。尚舞座の分担は、国堅（矢野弘之）古屋根（篠原一彦）鏡研ぎ（矢野喜八郎）稲荷さん（丸山茂）地鎮さん（浦野照男、丸山利久）岩戸さん（塩野入敏幸、桜井浩一）恵比寿（唐沢博、篠原三代治）猿田彦さん（萩原伸一、丸山実司）結び（篠原進、萩原邦治）であり、笛については八名だが専属で交代してあたる。

◎上演時の編成・囃し

神楽師が舞手、囃し方、裏方をお互いに交代しながら務めている。笛吹だけは専門に八名いる。顧問は出場者の指導にあたっている。

楽器の編成は大鼓（一）締太鼓（二）笛（三）である。曲は「三つ拍子」「半拍子」「テンテン」「岡崎」「餅投げの時の曲」を使っている。「三つ拍子」「半拍子」が基本になっている。

◎由来、付近の類似芸能

由来の所でも述べたように、昭和三十年頃になって、吾妻町の岩下の菅原神社から伝授されている。尚神楽は青梅市の御嶽神社の系統である。

◎参考文献

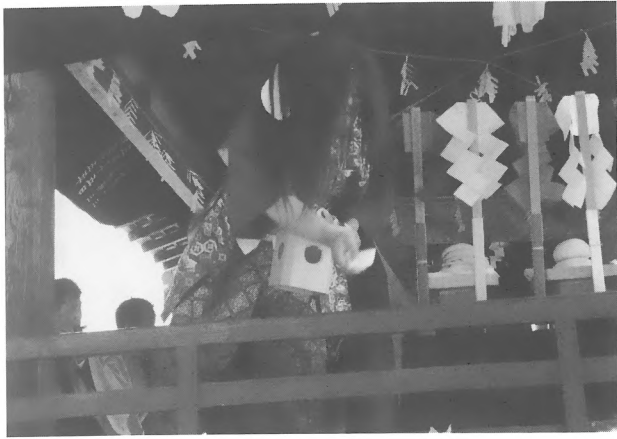
『長野原町誌（上、下）』 長野原町

『長野原町の民俗』 長野原町

◎神社の由来

天明三年の浅間山噴火の際、泥流の逆流を受けているといわれている。天明松とか、老松古杉のある神境をなしている。明治四十二年、下田八坂神社、北沢神明宮萩原諏訪神社、アブロウの八幡さま、与喜屋の愛宕神社を合併し、村社養蚕神社に改称した。別名猫石明神とよばれ養蚕に害のあるネズミ除けに靈験あらたかというので、社前の小石を拾って祈願して持ち帰り供えておく。翌年お礼に来る時川の河原の石を拾って神前に供えるという風習があった。

（坂寄富士夫）



〔与喜屋の太々神楽〕

皆泥海の下となり

牛馬の数を数うれば

二百六十五頭なり

人間数を数うれば

老若男女諸共に

四百七十七人が

十万億土へ誘われて

夫に別れ子に別れ

あやめもわからぬ死出の旅

残り人数九十三

悲しみさげぶあわれさよ

観音堂にと集まりて

七日七夜のその間

吞まず食わずに泣きあかす

南無や大悲の観世音

助け給えと一心に

念じ上げたる甲斐ありて

結ぶ縁もつき果てず

隣村有志の情にて

妻なき人の妻となり

主なき人の主となり

細き煙を嘗なみて

泣く泣く月日は送れども

夜毎夜毎の泣き声は

魂魄この土に止まりて

子供は親を慕いしか

親は子故に迷いしか

悲鳴の声の恐ろしさ

毎夜毎夜のことなれば

花のお江戸の御本山

東叡山に哀訴して

聖の来迎願いける

数多の僧侶を従えて

程なく聖も着き給い

施が鬼の段を設ければ

餓りの人々集まりて

皆諸共に合掌し

六字の名号唱うれば

聖は珠数を爪ぐりて

御経読誦を成し給う

念仏施餓鬼の供養にて

魂魄無明の暗も晴れ

弥陀の浄土へ導かれ

蓮のうてなに招かれて

心のはちすも開かれて

泣き声止みしも不思議なり

哀れ忘れぬその為に

今ぞ七日の念仏は

末世に伝わる供養なり

慎み深く唱うべし

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

原作者の瀧沢对吉氏は明治初年の議員であったことから、この和讃はその頃から続けられていると思われる。
(坂寄富士夫)



〔浅間山噴火大和讃〕

大笹神社獅子舞

一 伝承地

吾妻郡嬭窓村大笹の大笹神社。

二 由来

今から約八百年前信州諏訪大社から建御名方命、八坂刀売命を主神として諏訪神として奉祀したものであるが、明治四十二年三月、菅原神社、白山神社、大山祇神社を合祀して、大笹神社となっている。

この獅子舞は今より三百年程前から始まったといわれるが、明治十年頃大笹の佐藤定治外三名で信州小県郡十林寺で行われていたものを習って来て大笹の獅子舞とした。佐藤定治は文政十一年九月小県郡中曾根村で生まれ、大笹の佐藤孫四郎の養子となる。妻さんは小県郡栗林村の長女で天保八年四月生で大笹で生活していたので、獅子舞を習って来て教えるのに都合がよかつたと思われる。また一説には明治十年頃横沢村の永井久作の二男権次郎十日程大笹に来て教えたとも言われている。

一匹獅子で頭の中に二人は入り、後もちが一人計三人がかりになり。踊りはゆったりとした優雅な踊りである。

三 上演の時期

古くは七月二十七日といわれているが、養蚕やら農家の仕事の忙しさから、大正はじめ頃から、九月十六日、十七日大笹神社の祭礼にあわせて行われるようになって。十六日(宵祭)は午後から、十七日(本祭)は午前十時から、神社での神事のあと、地区内へ出て、地区内七、八カ所の広場で獅子舞を行い、地区内を廻る。最後に神社で神事を行って解散する。

練習は半月程前から、丸一団長の見つけた道場と呼ばれた所で練習を重ねて、当日に備えたが、現在は公民館が出来たので公民館で行っている。「丸一団」というのは伊勢神楽の流れを汲む団体で、格調の高い組織で、獅子舞を続けている。楽器

は笛(七穴)一本、つけ太鼓一つ、大胴一つ、道中を屋台でひくときは屋台の後に大胴と締太鼓をつけ、一人を二つを打つ、舞のときは大小一人ずつで奏する。笛を芯にして大胴が右、締太鼓が左に位置した。笛は神楽笛を奏して実に美しい音である。

屋台はかつての消防車を改造したもので、しめなわをめぐらし、ちようちんをつるして、屋台を仕上げ、大胴、締太鼓を取付けて、子供たちが引いた。宵祭にはれんがく燈籠を子供たちがもって練り歩く。竹の棒九尺程の先にれんがく燈籠をつける。道中の順序は「屋台ほんこ」(かさぼこ)、れんがく燈籠、屋台と続き、屋台のあとを舞い手が舞った。以前はこの人選を子どもが行って、大人は口出しが出来なかつたが、現在は大人青年団員が行っている。道中では道中ばやしを行う。

曲目

- ① 道中囃子
- ② しやんぎり (まくのうち、ごせいそく、うた)
- ③ 道中
- ④ しやんぎり
- ⑤ 神社演奏

獅子舞唄

ヤレナ皆三尺のおのさを持って

悪まはろうめでたいな

おばあさんも喜ばしやんせ

おぢいさんがはらんだとき

べつちよべつちよ米かめ

わしや正直歯がないよ

牛牛そつちを通れ

こつちは井戸のはうだよな

あのがきやへんがきた

おれみて笑つたよな

やれなこれで獅子舞唄

お村もはんじよう ヤレセソラ

いまひとつにゆうことが

ゆうべも三ばんぐつすり

まくらをなげて木曾の谷川へ

もみじを散らすソーレバドンドコ

◎ 最後の唄が歌い終わると、獅子が鈴ごとこへいをかけて怒り出す。大笹の古老のいうには、歌が下品で大笹の獅子は話にならん、といっている。しかし、かつて貧しければ貧しい程、心からの笑を人間が求めていた一現象であろう。

獅子唄のみでなく、村中をはやしあるくなかで、子供の囃しことばが、ベツチヨ、ベツチヨ、ヤツテ、ヤツテといいながら練り歩く、更に青年が迫車をかけるように、がなれ、がなれとはやしたてる。

獅子舞唄はやしことばの内容が下品であっても、施法は獅子舞歌流をもって、美しい。舞の美しさは他に類を見ないと思う。

勇壮な舞から、空中に上昇するかなのようなふりもある。前述したように、笛の施法は他の獅子舞になく、優美であり、各太鼓にぴたり合いみごとである。草深い山に伝承されて来ただけに、世間に知られず行われて来た獅子舞だが、他に見られないすばらしいものである。

この獅子舞の目的は悪魔はらいと、村内安全、家内安全、五穀豊穰などを狙いとして現在も引きつがれている。

◎特色

道中巡回の際、多くの「はな」があるが、何カ所かまでとめてその口上がある。「東西、東西〇〇氏より、一金幾百円也」と口上があり、終わると「しやんぎり」をお礼の意味で奏する。このような「はな」のともなう獅子舞が、県下でも残されている所があり、特にこの大笹では、貴重な資金源となっている。

◎附近の類似芸能

獅子舞は大笹の外、大前と袋倉、鎌原にある。大前は大正年間に長野県より師匠を呼んではじまったもので一匹だけの獅子であり伝承されている。袋倉の獅子舞も一匹だけである。鎌原の獅子は青年団の手で固く伝承されている。古い獅子を現代青年の感覚にアレンジして行っているが、実に鎌原地域にあったあみ出し方をして優雅である。古来伝承されている獅子を現代そのまま受けつぐ処に沈降現象を生じている。現代青年の感覚に合ったようにあみ出し方をして、行っていれば、鎌原地区の獅子のように、若い世代に伝承されていくと思う。

大正の初期長野原町の羽根尾の獅子舞に伝授されている。したがって、長野原の獅子舞と同じく「丸一団」の流れをくんだ獅子舞である。

参考文献

- 『孀恋村誌』 昭和五十二年 孀恋村役場
- 『孀恋村の民俗』 昭和四十八年 民俗調査報告書十五集 県教育委員会
- 『群馬の獅子舞』 昭和五十八年 群馬県獅子舞保存会 (坂寄富士夫)



〔大笹神社獅子舞〕



〔大笹神社獅子舞〕

前口獅子舞

一 伝承地

吾妻郡草津町大字前口は草津町のほぼ南部に位置している、前口獅子舞を奉納する、建御名方の神を祭る諏訪神社は、前口集落のほぼ中央に在り、氏子は二二〇戸を数える。

太平洋戦争の直後は一二〇戸ほどであったが、観光など温泉町の発展により、また気候その他の関係からベッドタウン的な様想となり近年急速に人口の増加を示している。

二 上演の時期及び場所

諏訪神社の祭礼に奉納される日は、一月一日の元旦祭、四月十四日春の祭典、九月十四日の秋祭りである、場所は拜殿で舞われる、昔は元旦祭のほか春祭は四月十四日、十五日、十六日の三日間、秋祭は九月六日、七日、八日の三日間行われた。尚現在、町の文化祭、前口集落の運動会にも参加している。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 氏子の繁栄と安泰、五穀豊穡および悪魔払いを祈願するもので、神社の祭典前に諸準備を行い、全員仕度をして祭典の式に参列し代表者が玉串の奉奠をする。祭典終了後に拜殿で舞を奉納する（今回は写真撮影のため拜殿前庭に敷物を敷いて舞った）。奉納の終わったあと集落全体の各家をまわって、悪魔払いをして、金や物をもらい、それは全員に配分される。

(2) 設備、道具①拜殿で行うので特別の設備は必要としない（今回の場合は敷物をしいた）、②道具、獅子頭、面（オカメ、ヒョットコ）、ごへい、衣裳。

(3) 役名、扮装、楽器⑦獅子は、モモヒキをはき、ハラガケをつけ、足には白たびをはき、獅子頭をかぶる。①オカメは、黄色の着物を着てその上に袖なしはんてんを着て白足袋をはき、オカメの面をつけ、扇子を持つ。②ヒョットコは、白足袋

とモモヒキをつけ、草色の着物と袖なしはんてんを着て、ひょうたんを腰にさげ、ヒョットコの面をつけ、頭に頭布をかぶり扇子を持つ、③ヨビダイコは、モモヒキと白足袋にはらがけ、はんてん、ハチマキをして、バチを持つ。④オケドウダイコは、白タビ、モモヒキをはき、ハラガケ、はんてんを着て、バチを持つ。⑤シメダイコはオケドウダイコと同じ。⑥カネは、白足袋、モモヒキをはき、ハラガケ、はんてんを着て、小さなしゅもくを持つ。⑦笛は着るものは同じで笛を持つ。⑧歌をうたうものは、白足袋、モモヒキ、ハラガケ、はんてんの仕度である。

楽器は、①大太鼓、②オケドウ太鼓、③シメ太鼓、④カネ、⑤笛、⑥鈴

四 歌詞

(1) 春はうぐいす、あだな初音にだまされて、梅も桜も咲きよかし ア、ウワ、ウワ、ウワ

(2) 夏は、両国、屋形屋根船入りちがい、玉屋花火、揚げてしもうたそのあとは、実にすがしじゃないかいな ア、ウワ、ウワ、ウワ、ウワ

(3) 秋はさもしか、紅葉ふみわけ鳴く鹿の、声聞く時ぞ、秋夜かな ア、ウワ、ウワ、ウワ

(4) 奥洲仙台、岩沼の 六兵衛殿のこう薬は、あれやこれやにきかなんだ、あかぎれなんぞにやようきいた、されば取れ秋、豊年じゃ、満作じゃ、ア、ウワ、ウワ、ウワ

五 演目・芸態

演目 ①呼び太鼓、②神しずめの舞、③いかりの舞、④いねむりのかたち、おかめ、ひよつとこの舞（春夏秋冬の歌をうたう）。⑤おさめの舞（目をさました獅子があれくるう）。

(2) 芸態 ①呼び太鼓、中央に大太鼓が出され、はんてん、ももひき姿の二人がバチを持つて出る。指揮者の合図で、向き合って太鼓をにぎやかにたたく。②神しずめの舞、しめ太鼓のはやしで獅子が中央に出る。指揮者の合図で、獅子の右前に、布をたらしした両腕を五回まわしながら五歩進み両腕を後に三回まわしながら三歩で

もと位置にもどり、次に左前に両腕を五回まわしながら五歩進み、両腕を後に三回まわしながら三歩さがりもとにもどる。次に正面に両腕を三回まわしながら三歩出て三回後にまわしながら三歩で元の位置にもどる。正面に立つと、一人が御幣と鈴を持って出て獅子に渡す。獅子は御幣を右手に、鈴を左手に持ち、前と同じ動作を三回してもとの位置にもどって、御幣と鈴を返す。③いかりのかたち、獅子がオケドウ太鼓とせめ太鼓のはやしで、指揮者の合図により、獅子頭を高く低く振りながら、左に三回振り、右へ大きくまわり、正面をむいて左右にふり、右へ大きく一回まわって中央にしゃがみこむ、④いねむりのかたち。笛とオケドウ太鼓、せめ太鼓のはやしで、春、夏、秋、冬の歌をうたう、そのとき獅子は、いねむりのしぐさをしている。オカメは赤い扇子を持ち、ヒョットコは青い扇子を持って出る。その扇子をかざしながら獅子の右前にヒョットコ、左前にオカメがしゃがむ、双方がお化粧のしぐさをする。ヒョットコが両手を高くあげてオカメをうながし、笛と太鼓のはやしで獅子のまわりをまわる。二回まわった所で、ヒョットコが獅子にいたずらをしようとするが果せない、次にオカメが紙きれをヒョットコに渡す、ヒョットコは紙をかたくひねり獅子の鼻の穴へねじこんで逃げ後へまわる、獅子は目をさます。⑤おさめの舞、目をさました獅子は頭を高く低く二回振って三回目が高く上げて正面におさまる。

六 組 織

行事の運営は、二二〇戸全戸による前口獅子舞保存会（昭和四十一年十二月三日発足）によって行われる。昔は青年の行った時代もあったが、現在では前口に住む、草津町立草津中学校の生徒全員によって行うようになった。指導者は長年の経験者、水出文夫および他の経験者か補助役となり行う、稽古始めの年齢は中学一年生（十二歳）であり、稽古する場所は、諏訪神社境内にある集会所で行う、奉納に際しての費用は毎年草津町からもらう補助金二七、〇〇〇円により運営される。

七 由来及び付近の類似芸能

大陸から渡来した伎楽、舞楽、散楽が日本全土にひろまったと伝えられている。

この獅子舞は、記録いっさいなく詳かにすることはできないが、明治時代のはじめ隣の長野原町大字大津に住む師匠から氏子に伝授された遠州流の流儀をくむものと伝えられている。太平洋戦争ごろまでは集落の青年によって奉納されていたが、戦後になって中学生が舞うようになり、健全育成団体として表彰されたり、補助金の支給を受けている。類似の芸能は、嬭恋村大字鎌原と大笹の獅子舞であるが、舞い方に相違が見られる。

八 記録・文献

「前口獅子舞太鼓音譜」

九 特色・所見

昔は青年が行っていたものを中学生が行うようになり、それを青年が指導補助をしているのは前口集落がまとまり、お互いに認めあい、助け合う姿を維持向上させていく、すばらしいものである。指導者の一人は、「小学生が早く中学生になりたい。獅子舞に参加できるからという声を聞くとき、中学生に舞わせてよかった」と語る。地域の人々と交流を深める中で、先輩をうやまい、神に奉仕し、神に近づくことにより、道義を養い、ひいては地域に奉仕する心と行動が培われると考えられる。全国各市町村で、生涯学習を推進する中で、青少年健全育成の趣旨をふまえたこの獅子舞は、伝統をくずすことなく、永く次代に継がれていくことをねがうものである。前口獅子舞保存会長、水出文夫氏、前口諏訪神社氏子総代、高原徹夫氏に深く感謝と敬意を払うものである。

（奈良 秀重）



〔前口獅子舞〕

やくばら 役原獅子舞

一 伝承地

吾妻郡高山村の西北西に位置する、大字尻高の一集落「役原」に伝承される獅子舞で、集落は戦国時代の「役原城跡」を中心に展開されている、この城跡の北側の山根に祀られる「諏訪神社」と「浅間神社」に奉納している獅子舞である。

二 上演の時期及び場所

諏訪神社の祭りは、毎年八月二十七日、年に一度だけ奉納されるものであるが、專業農家はほとんど無く、兼業となってきたこと、社会情勢の変化等の関係で、平成六年度から、八月二十七日にいちばん近い日曜日に祭りが変更になり、この日に神社の前の一段下に設けられている「庭」で奉納される。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 悪魔退散、五穀豊穰、家内安全、交通安全を祈願する獅子舞で、神社の祭典の儀式と併行して行われるもので、公民館（昔は大世話の家を宿とした）の前で勢ぞろいをし「シャギリ」のはやしをした後に「供物」「カサボコ」「タナバタ二本」「神主」「笛四人」「頭」「シャグマ」「先獅子」「シャグマ」「中獅子」「シャグマ」「後獅子」の順で神社まで「道中シャギリ」「三足ぶり」「デハ」のはやしをしながら行列をする。社前に着くと「諏訪」「浅間」両社のまわりを七回まわる「シチドウ」を行い又奥の院に行き「シチドウ」をする。ここで神社の祭典となり、獅子は休む。昼食後、「前庭」約四十分、後庭約三十分を奉納する。前日の「ブツツォレエ」のあと毎戸をまわって「アクマパレエ」をする。

(2) 設備・道具 社殿に登る石段の向って右下の低い平らな所を庭と呼び、ここに長さ一八〇センチ、幅九〇センチのむしろを敷き、舞う場にする、庭の東側に、杉の枝などで囲ってむしろを敷き、長机を置いて、獅子頭をはじめとする道具を置いたり休んだりする所「楽屋」とする。「庭」の四すみに竹をたて「しめ縄」がはら

れる。杉の木の棒の先に円形の輪をつけ、細い割竹に紙を折って作った「ハナ」をつけ、その輪のまわりに二十本ほどをつけた「カサボコ」をつくる。枝葉のついた若竹に色紙のタンザクをいっばいつけた「タナバタ」を二本作る。

(3) 役名・扮装・楽器 頭はゆかたをきて、袴をつけ、黒足袋、ぞうりをはき、腹に大ぶりのしめ太鼓をつけ、バチを持つ。先獅子、中獅子、後獅子は、白シャツを着てタツツケ袴、わらじをはき、獅子頭をかぶり、腹には三ツ巴の模様をかいたシメ太鼓をしぼりつける、頭は動物の毛がついてあり、その後白い紙に切り目をつけた「カミサマ」をいっばいつけ、前は、透きとおって見える。「タレ」がさがっている。太鼓の胴には赤い布をまきつけ、模様のある布ひもではばつてある、五色の紙で作ったタレをつけた「バチ」を持つ。シャグマは、白シャツを着てタツツケ袴、黒タビにわらじをはき、あたまに丸い笠様のもので動物の毛をつけ、てっぺんに色紙を幾重にもつけた「シャグマ」をかぶり、石だたみというあみ方をした布ひもでタスキをして「ササラ」と棒（ハナをつける）を持つ、全員が五色の紙で作った「ゴヘイソク」を右後の腰につける。

楽器は、太鼓、ササラ、笛（六号）四本。

四 歌詞

- (1) 此の森に鷹が住むげて鈴の音 鷹は住まねど御神楽の音 ヤアギンギャクヤ
- (2) 此の宮は飛驒の工が建てたげで 楔一つで四方締めたよな ヤアギンギャクヤ
- (3) 此の宮は四方の柱は白金で 黄金社殿で御庭輝く ヤアギンギャクヤ
- (4) 十七の袖や袂に糸つけて 思い思いに引けや友達 ヤアギンギャクヤ
- (5) 掛川の宿の娘に目がくれて 立つに立たれぬ掛川の宿
- (6) 白鷺が海の中に昼寝して 波にゆられてはらはらと立つ
- (7) 今までつれし女獅子をば 此れの御山に隠しとうられた隠しとうられた
- (8) 貴方も雄獅子此方も雄獅子 心合せて尋ね逢う女獅子 尋ね逢う女獅子
- (9) 何と女獅子が隠れども 是れの御庭で尋ねとうられた 尋ねとうられた
- (10) 七夕に借りて貸すぞよ綾錦、綾と錦を借りて七夕 借りて七夕

- (11) 松にからまる草葉みも、縁が切れれば ぱらりほぐれる ぱらりほぐれる
 (12) 何時か夜もあけ、花の朝霧
 (13) 彼の山に松を育ててにいをすれば 鳶はよせもの松にからまる松にからまる
 (14) ササラを返してすりとめたよな すりもめたよな (後庭の歌略)

五 演目・芸態

- (1) 演目 ①七道^{しちどう}、②前庭^{まへにわ}、③シャギリ、④デハ、⑤キリカタ、⑥ギンギヤク、⑦ニワミ、⑧カケガワ、⑨カツカ、⑩タナバタ、⑪アサギリ、⑫イリハ。⑬後庭^{あひだ}、⑭シャギリ、⑮デハ、⑯ヒヤトヒヤア、⑰ギンギヤク、⑱オカザキ、⑲オオギリ、⑳イリハ。

(2) 芸態 ①七道、公民館(宿)から行列をして社の前につき、諏訪神社、浅間神社、奥の院それぞれにタナバタを先頭に社のまわりを、シャギリのはやしをしなから七回まわる、この時、カサボコは社の東側に立てておき終りまで動かさない。
 ②前庭、③シャギリ、楽屋からはやししながら、タナバタ、笛、頭、シャグマ、先獅子、シャグマ、中獅子、シャグマ、後獅子の順に庭へ出て、タナバタを中心に円陣をつくる。④デハ、頭も舞の中に入り、内側、外側をむき、両足を交互にあげながら笛に合わせて太鼓をたたき右まわりに舞う。⑤キリカタ、円陣のまま、バチを高くあげて、左、中、右と三回たたき、右へ早くまわる。これを三回くり返す。⑥ギンギヤク、足を三角形に動きながら、バチを高くあげて前、後に動きながら舞う、このとき(一)〜(四)までの歌に合わせる(笛はない)。⑦ニワミ、笛に合わせて、獅子とシャグマが組んで三組となり、庭いっばいの三角形になって舞う、庭の様子を見きわめる舞と云う。⑧カケガワ、シャグマが北側に獅子が南側にわかれて立ったまま太鼓をうつ、このとき獅子は扇であおいでもらう。⑨カツカ、獅子とシャグマと組んで三つになり、中(雌)獅子を先(雄)獅子と後(雄)獅子とが見つけ合う舞で「ケンカ」と云う、先獅子が中獅子をさきに見つけて「シャレックラ」をするという、後獅子がその中に割りこむ動作もあり、先獅子が俺が中獅子を取ったというしぐさもあるが、後獅子は見つけられないで終わる。最後は円陣をつくり右まわりにはねながら舞う。⑩タナバタ、けんかもおさまり、庭いっばいの円陣となり、頭もいっ

しよに舞う、三足ぶりを舞いながら、タナバタ、松にからまるの歌に合わせて舞う。⑦頭を真中にして円陣となり、三足ぶりをして、太鼓だけのにぎやかなはよしとなり、笛に合わせた三足ぶりとなり、松にからまるの歌に合わせて舞う。⑧イリハ、円陣から右にまわり南側に一列にならび、北へ一回進み後ずさりに南側へもどり一列となり、つぎに円陣をつくり、笛に合わせて舞いながら楽屋へ入る。(後庭は略す)

六 組 織

- (1) 行事の運営組織、役原獅子には保存会はなく、したがって規約もない。集落の戸数は六十一戸あり、それが八組で構成されている、毎年各組から一人の世話人が選出される、その世話人八人の互選で大世話、会計など役員がきめられ、この八人によって運営される。昔からの伝統である。費用は、各家に諏訪神社のお札を千円で受けてもらった金とこの集落を中心とした特志寄附金によってまかなわれる。
 (2) 出演者の資格 現在は獅子頭は中学生男子、シャグマは小中学生男子で構成されていたが、子どもの数の変更により女子も入れなければ出来ない状態におかれている。昔は長男もしくは家のあとを継ぐ者だけで組織されていた。
 (3) 指導者の資格 三十数年も頭をつとめる長い経験者(大淵隆志)によって指導がされており、世話人の中の経験者が指導の補助役をつとめている。
 (4) 稽古はじめの年齢 獅子、シャグマともに十歳〜十二歳である。
 (5) 稽古の時期 お祭りの日の十日前から毎夜公民館(昔は大世話の家から宿を買った家で練習をした)。

七 由 来

尻高城主、尻高左馬頭重儀が役原城に隠居し、城の北を流れる「辰己川」をはさんだ小高い山の中腹に諏訪神社を創建したときに重儀が青少年時代過ごした、埼玉県寄居町の鉢形城の諏訪神社に伝わる獅子舞をならわせたのがはじまりと云う。尻高城も役原城も真田軍の攻めを受け落城、集落も戦禍に会い、獅子舞も途絶えた。その後江戸時代になり、旗本領となったが領主の肝いりで、獅子舞が復興され、諏訪神社に五穀豊穡、悪魔退散、氏子安泰を願って奉納され現在に至っている。

八 付近に類似したもの

隣の町中之条町には雄獅子二、雌獅子一、ササラの舞うものがあるが、舞の呼び名のちがっているものばかりである。

九 記録・文献

道具の保管箱の中に、弘化三年丙午七月吉日、当村中の墨書銘あり。

十 特色・所見

近くの町村を見ても、特別に保存会を組織して規約をつくり、年会費を集めており、奉納も保存会が中心になっている所が多いが、役原獅子は集落中で昔から伝えられてきた獅子連本来の形で奉納されているもので、集落の誇のひとつとなっている。高山村指定の無形民俗文化財である。

(若月 暎)



〔役原獅子舞〕



〔役原獅子舞〕

尻高しつたか人形

一 伝承地

吾妻郡高山村大字尻高しつたかは高山村の西の地域で、村を東西に横断して流れる「名久田川」の流域に転在する、役原、関田、戸室、火の口、熊野、北の谷、小屋の七つの集落からなり、その中の関田、戸室の人たちによって伝承されている。

二 上演の時期及び場所

時期については不定期に上演されている、村の文化祭、敬老会その他要望によって何時でも上演するものである、むかしは、座敷や土間の広い民家を会場として上演されたが、生活様式の変化にともない上演できるような民家がなくなつたので、公民館や学校の体育館、劇場、多目的会館の上演が多くなつてゐる。民俗芸能発表会、研修会のアトラクションなどで上演している。定期的に行われるようになったのは、平成九年で第二十一回になつたが、二月の第一日曜日に、中之条町の数人の人によって、その地域の老人を招待して、中之条町の「金幸」において上演している。

演目の内容について説明を行い、印刷物も用意されて行われている。

この上演は経験を積む貴重な上演であり、金幸の主人の「観る後継者をつくる」の言葉によって励まされているという。

三 上演の次第・構成・演目・芸態

(1) 上演の次第 上演する場所が決定すると、組立式の舞台、人形、衣装、道具などを運び、舞台づくりを行い、演目にしたがい、人形に衣装を着せるなど諸準備を整えて上演する。

(2) 構成 座長外九名で座がつくられており、上演する演目にしたがい、人形使用の役割りがきめられ、はやし、雑務などの役が割り当てられて上演がはじまる。

(3) 演目 ⑦絵本太功記(尼ヶ崎の段)、①傾城阿波の鳴門(巡礼歌の段)、②伽

羅先代萩(政岡忠義の段)、③艶姿女舞衣(三勝半七酒屋の段)、④蛇龍ヶ淵嫉妬の仇浪(日高川の段)、⑤増補顔日記(宿屋より大井川の段)、⑥奥州安達ヶ原(袖萩祭文の段)

(4) 芸態

⑦三番叟 幕開きの祝いに演ずるこの三番叟は、尻高人形唯一の二人遣いの人形で四つまをふみ潔める。舞礼講になると、舌を出しておどけた舞をする、一名、ヘラ(舌)出し三番叟と云っている。

①伽羅先代萩(政岡忠義の段) 若君鶴喜代を暗殺計画から守るため、乳母の政岡は、表向きは鶴喜代を病気として外の接触を避けていた。食事も用心深く、自身で用意し、同年の息子千松を犠牲にする決意でいた。ある日山名宗全の妻、栄御前が主君の頼朝からの見舞いと偽って、毒入りの菓子を持参したのを、かねて教えておいた通り、千松が横あいから食べてしまい、苦しみだす。事の発覚を恐れた「八汐」が、とっさに千松を刺す。実子の惨殺にあつても忠義を貫いて顔色を変えない政岡に、栄御前は、鶴喜代と千松がとり替へつこになつてゐると思ひこみ、陰謀さえも打ち明けてたち去る。そのあとで政岡は、千松の死骸に取りつき、悲嘆に泣き、口説を続けるのである。

⑦蛇龍淵嫉妬の仇浪(日高川の段) 山伏の安珍は、道城寺への旅の途中に清姫と心ならずも契りを交してしまい、破戒僧になつてしまった。安珍は、我が身を恥じてこの場を去る。それと知つた清姫は、安珍恋しさに後を追う。途中日高川にさしかかる。船頭に何とかむこう岸へ渡してほしいと頼む、けれども、安珍から絶対に清姫を渡してくれない、恋する人に裏切られたと知つた清姫は、恨みはらさでいるものと、身を大蛇に変じて川を渡る。(外は略す)

このような、あらずじを観客に渡し、更に説明を加えて、浄瑠璃に合わせて演ずる。

四 人形の形式

この人形の一人遣いの特殊な人形として知られているもので、一名「差し金人形」

と呼ばれている。差し金とは、現在の文楽人形で左手に取り付けられている長い操り角棒である。この差し金に紐がついていて、それをひっぱることによって人形の左手が閉じたり開いたりするようになっていく。文楽三人遣いでは、左手はそれ専門に一人が使うのであるが、この尻高人形は、一人を一人で使うのを本体とする関係上、この差し金は指の開閉よりも左手全体の動きを大きくするために使われるものである。したがって差し金が右手にもつけて使うようになっていく。

上演の時には左手で人形のカシラの串をあやつり、右手で二本の差し金を使いわけて、いろいろな動作をさせるのであるから、一人遣いにはめずらしく、両手の可動範囲が広いのが特長である。差し金はすべて竹でできており平均長さは約四〇センチメートルである。約二九センチメートルの所に「小猿」と呼ばれる小片をつける、この両側に紐がつき、右を引けば指が開き、左を引けば元にもどるように仕掛けてある。一人遣いのために制約された創意が表れている。構造上の特長は、その串である。串は普通芯串と呼ばれているが、ここでは「さし」と呼んでいる。この「さし」が県内の他の豆人形より非常に長くできており、約二二センチメートルである。さしは使う時に後から左手を入れて握るためである。カシラは、頭頂からあごまで約九〜一二センチメートルであるが、立ち役カシラは目と眉、手、口の動くものであるが、その操作は麻糸か三味線糸で「さし」の上方に引き出される。これが串の中を通らずに、串につけられた縦の溝に引きこまれ、その下方に小猿をつけてこの小猿を動かすことによってそれぞれ、目、口、眉などを動かす。尻高人形は、我が国独特の、人形、浄瑠璃、人の三者一体でも出し出すばらしい芸術が改良され工夫されたものである。〔郷土芸能と行事〕 萩原 進著

五 組織

座員の構成、むかしはほとんどが農家の者であったが、座員も多く、世襲性のよくな面もあったが、今では職業もさまざまで、公務員、会社員、建設業、造園業、農業などである。現在の座員は、座長、若月 暎(62)、町田寅之助(71)、中嶋弘六(65)、関 亜刃美(51)、小淵喜八(43)(連絡係)、割田毛利男(47)、飯塚哲也(45)(会計)、飯塚 稜(43)、荒木 長(64)、都筑康弘(45)の十名である。

六 由来及び付近の類似芸能

(1) 由来 この型式は「豊松流」である。豊松流というのは、名古屋に生まれた人形芝居の一派である、江戸と大阪両系統の中間に発生したもので、元祖は豊松伝七という人で、徳川時代中期の人である。埼玉県に伝えられた跡があり、伝えたのは豊松伝次であった。

尻高へ来て教えたのは、伝次の次の第三代綱七の次の代、すなわち第四代の伝三である。現在ある「免状」によると「豊松家流義の窮理は秘事と為すと雖も足下数年の流義御修浅からざるに因り、之に依り今伝授せしむるの事、他言あるまじきもの也。豊松流の祖、豊松伝七。豊松伝次、豊松綱七、豊松伝三(花押)、明治十九年仲春吉日、豊松与伝次殿とあり、明らかに豊松流の伝三が、尻高の与平(尻高の火の口、山田与平)に教えたことが明らかである。〔郷土芸能と行事〕

この人形は、一名「伝サン人形」と呼ばれ、このような小人形の棒遣い人形が村人に親しまれ、幕末から明治にかけて盛んになったといわれる。山田与平は免許をもらうと「豊松与伝次」と名のり、豊松座を結成し、初代の座長となり積極的に上演活動をし、老齢になると二代目座長を「豊松古伝次」(中嶋春吉)に譲るのであるが大正時代に入ると何らかの理由で上演がされなくなった。昭和八年の秋深い頃に、人形が中之条町の古物商に売られてしまったのである。古伝次と町田亀吉の二人で金工面をして売り値の二倍以上の価格で買い戻したのである。もちろんこの金は一座の者で出したのである。その後一座を「錦松会」と名乗りをあげ、伝三人形が復活し、座長に「豊松美登里(町田亀吉)が就き再興できたのである。通算三代目である。その後、四代目には「豊松京之助」(荒木大太郎)、五代目「豊松花之助」(中嶋 貢)、六代目「豊松花好」(若月 暎)で現在に至っている。

(2) 付近の類似芸能 勢多郡敷島村津久田(現赤城村)の人形芝居で豊松と名乗る人形遣いの居たことが、神社の拝殿の絵馬に書かれている(現在廃絶)
中之条町上沢渡字反下の人形芝居、吾妻町大字三島字唐堀の人形芝居があったがともに廃絶、系統は不明。

七 記録・文献

免状があるのだが現在の座長はその「写」を持っている。

八 特色・所見

まず、吾妻の一寒村に名古屋生まれの、しかも他には見られないような人形芝居が、なぜ、どうして伝えられたのか不思議である。人形の特色にしても、一人遣いという小さなものでありながら、動作を大きく見せるための精巧さ、まさに驚きの一語である。また、この一座を継承してきた経緯をみるにつけても、座長をはじめ座員の目に見えないひたむきな努力が現在、大きく認められる基であることは事実である。現在、高山村をはじめ近隣町村の支持者の力もさることながら、現在の座員は自分たち仲間と実際に芝居をやっていることにより、舞わせる人形と心をひとつにして上演しようと努力を重ねている姿は、演技を充実させると共にすばらしい伝承を未長く伝えていくものであると頭のさがる思いである。

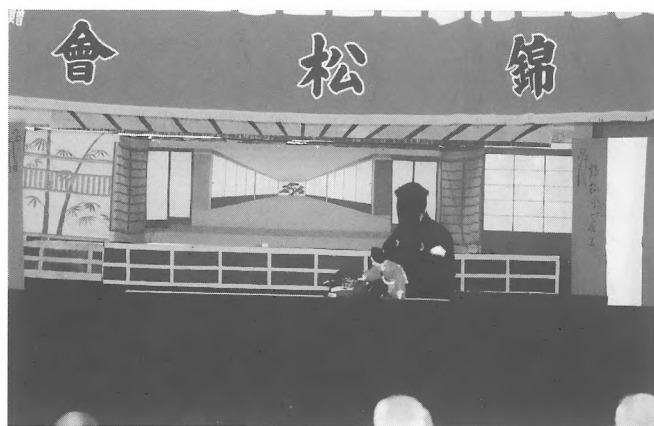
(奈良 秀重)



三番叟



先代萩政岡忠義の段



先代萩政岡忠義の段



蛇龍ヶ湊嫉妬の仇浪（日高川の段）



蛇龍ヶ湊嫉妬の仇浪（日高川の段）



蛇龍ヶ湊嫉妬の仇浪（日高川の段）

おかのや 岡谷の獅子神楽と野郎万才

一 伝承地

沼田市岡谷町に伝わる。岡谷町は、旧利根郡池田村の南端で薄根川右岸にあり、寛文年間に岡谷堰の開発と同時に宿割ができ、人々が移り住んだ。昭和二十九年四月に他村、町と合併になり沼田市となった。町内を関越自動車道が通っている。

二 上演の時期及び場所

祭日は四月三日で、一カ月遅れの節句と旧神武天皇祭であるので神楽を舞う。戦時中は中断していた。戦後は青年団により続けられたが、できなくなり村へお願いしてやらずにいたら火災が次々に発生した。昭和四十四年岡谷民芸保存会ができ同五十年代までは続いていたが現在は中断している。神楽は会場（公民館）から出て諏訪神社、熊野神社、区長のいる地域から回り始める。東部・中部・西部・田中・南部の地区を回る。昔は薄根川の左岸木田坂まで岡谷であったので、木田坂の方は最後に回る。再度、夕方五時頃熊野神社に寄り会場で終わる。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第 神楽は、岡谷住民の家内安全、五穀豊穡、無病息災を祈る神事として行われてきた。この神楽は獅子頭を神座とする獅子神楽であり頭で舞って悪魔払いをする。当日の舞いは神楽一人、大太鼓と締太鼓二名で、庭に入る若青年団全員が「毎年参る、大神楽、悪魔払い出せ」と言う。すると太々神楽の歌が途中の「三尺の御幣を以って悪魔を払い」から始まり、神楽を舞う。庭での舞が終わると青年団員四名が家の主人に「おめでとうございます」とあいさつする。神楽は茶の間に入る時に耳を動かし怒る。神棚で口を開き「パクパク」三回かむまねをし、仏壇でも同様のことをする。家の主人の頭からかむまねをし、子どもは逃げ回る。この間本年度青年団に入った新会員が神楽師の下駄を台所の方へ回しておく。神楽は台所から出てくる。区長、区長代理、議員、青年団役員、村役員、公民館、

神社、寺、旧家（赤井、多四郎、本衛門）では神楽の歌「千早振る神代の昔素戔嗚のイヤマダイヤマダ」の最初から歌う。神楽が家から出てくると休憩になり、庭にネコ（敷物）を置き、その上で余興（所作事）が始まる。余興は「万才」「鳥さし」「神楽のひるね」「こんべが種まき」「おかめのご祈禱（おかめひつとこ）」のどれかをする。何をするかは青年団の師匠（指導者）の二人が決める。師匠はどの余興もできる。一日かけて全戸一三〇戸を回る。各戸からのお礼は昔は米一升、麦一升（挽割り麦）が普通で、農家以外の家では金であった。計米三俵、麦二斗ほどになり売って現金に替え一年間の青年団の経費とした。喪中の家は庭先に幣束を付けた縄をはり神楽が入らないようにしておく。

(2) 設備・道具 獅子頭は伊勢皇太神宮の檜の一本くりぬきで重さは五キロ、奥歯でかむので義歯だとできない。一人が数軒回ったら交替する。昔は神楽には神楽堂という家型をした一メートル四方、重さ二五キロのお宮があり一本棒を使い二人でかついだ。神楽堂上部は観音開きで内部に幣束、下部の引出しには神楽道具が入っていた。七十年ほど前には神楽堂、太鼓を大八車のような車にのせていた。神楽堂がなくなつてからは棒で太鼓をかつぐようになった。昭和十年三月十日に会場近くの家から火災が発生、会場に保管してあった神楽を持ち出す時に神楽にかけていた布に火がつき、頭の右側半分を焼失、同二十五年に頭を二三〇〇円で修理した。頭の口中の赤布は、舌の代わりで中の人物の顔が見えないようにしている。頭を付けて舞う人は右手に幣束、左手に鈴を持つ、他にひつとこ、狐、おかめなどの面、さお、印ろうなどがある。

(3) 役名・扮装・楽器 役は師匠二人、神楽、大太鼓、締太鼓で、明治の頃は三味線、大太鼓、締太鼓、鼓、笛二人、鉦などの囃子道具や丸一大神楽が使う手裏剣や毬もあつた。団員は全員必ず着物、羽織で太鼓をかつぐのは新会員である。「鳥さし」は、色紙の花を付けたすげ笠を背に、頭にはひつとこ（そうすけ）面、上衣は豆しぼりの襦袢に腹かけと半てん、下衣はももひき、腰に印ろう、足袋と草履、手にさおを持つ。「こんべが種まき」の「こんべ（ひつとこ面）」は、襦袢にももひき、くわを持ちショウギ（種を入れる）を使い。おかめは、女性の着物で弁当を背おう。狐役は、青年団の経験の浅い者がする。「おかめのご祈禱」は、おかめとひつとこ面

を被り、ひっとこは幣束と鈴を持つ。「神楽のひるね」は、獅子、ひっとこ、おかめが出、ひっとこは扇子を持つ、おかめは妊婦姿をする。「万才」は、太夫と才蔵の二人、太夫は、ひっとこ面と下半分を切った面を被り扇子を持つ。才蔵は、羽織を裏返して着、そうすけ面を付け鼓をかつぎ扇子を持つ。

(4) 歌詞 太々神楽の歌(役員、区长、旧家は最初から歌う)

千早振る神代の昔 素戔嗚の イヤマダ イヤマダ (途中略)

三尺の御幣を以て悪魔払(一般家庭はここから歌う)

朝日さす夕日輝く其の下に小判千枚数千枚(途中略)

太平楽とは舞い納め

「鳥さし」のことは

「ああ さしたりな さしたりな 鳥さいな 見っさいな チンチク(途中略)としては十六 まだ齒はしろし せんなり ぐんなり 千秋楽とは 舞い納め」

「ごんべが種まき」のことは

「もしもし かっさん(ごんべ) かつごろうさん もみじの下には雪がある さぞ寒かったでござんしょ」

「おかめご祈禱」のことは

「夕べ 妹が半産(流産)して 大夫さんに ご祈禱しにきてもらいたくて来たんだ。」「何に 夕べ 妹さんが半産して 裏の柿の木に半てんをひつかけて それを取ってもらいたくて 来たんだって」「いやそうじゃない 夕べ 妹が半産して (途中略) ひやいひやいとろろ ひやいとろろ よーいと よーいと よーいとよな」

(5) 演目・芸態

神楽と余興から成り、野郎万才は若者のいたずら万才、若者の万才という意味から名づけられたといわれている。出発の会場では怒らないで帰りの熊野神社と舞い納めの会場では怒る。怒る様子は、耳を動かし耳をたてることをいう。怒ることで悪魔払いをする。耳が前にくると寝ているようになる。

太々神楽歌にあわせて神楽を舞う時の動きの順

①Aから出てBに向って進む

イヤマダ イヤマダで方向を変える

②BからCに向かう

イヤマダ イヤマダで方向を変える

③CからDに向かう

イヤマダ イヤマダで方向を変える

④DからEに向かう

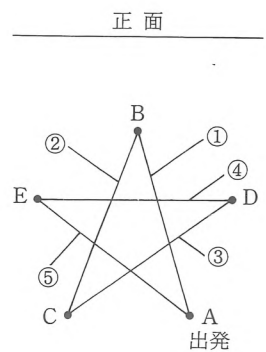
イヤマダ イヤマダで方向を変える

⑤Eから最初のAの位置にもどる

鳥さしは、す踊りで鳥がとれずに長い道中を鳥を追いながら、ついには信州善光寺まで行ってしまった。万才は伊勢まいりへ行く途中の様子をユーモアをまじえて表現している。

四組織

昔は高等科でも六年でもよいから小学校を卒業すると酒一升を持って青年団に四月三日に入ると、すぐに神楽に参加した。神楽堂をかつぐのは新会員の役目で一本棒を使い二人でかついだ。この土地で生まれた地子(じっこ)はかつがず、他村より来た婿がかつぐことになっていた。他村では「岡谷には婿に行くな、行くと神楽堂をかつがされるから」と言われ、つらく、かつぎにくかった。新会員は、また神楽師の下駄の番をする役目でもあった。青年団員は五十名ぐらいいはいた。現在は岡谷民芸保存会の会員四十三名ほどで守っている。昭和五十六年の出演者は、会長は山田哲男、山田正、大島文平、井上都志、牧野岡次、牧野幸吉、大島文平、大竹佐久太、大竹史氏、岡谷光一、大島善司、中村博、牧野正男、牧野良信、原稔、小林博、大竹晴幸、七五三木厚明、牧野公一、阿部匡房、牧野忠義、志賀央二等であった。稽古は三月中頃より始め地元生まれは参加できるが、他からの婿は参加できない。三十日までで稽古は一通り終わり、最終日に稽古樽といって、師匠(指導者)に酒でお礼をする。稽古期間は十日間ほどであるが個人的に稽古をしなければ覚えられない。



五 由来及び付近の類似芸能

この神楽は享保二年(一七一七)から続いているが、太々神楽の歌は延享三年(一七四六)からと伝えられている。神楽は岡谷に流行病が広まり易にみてもらったら「神楽を舞えば病気はなおる」と言われたので、獅子頭を造り村中一軒残らず悪魔払いをしたら病気はなおった。明治の中頃が一番盛んであった。

六 記録文献

『群馬県の無形文化財』 群馬県教育委員会 野郎万才 阿部孝

沼田市史民俗調査報告第四集『池田の民俗』 獅子神楽 金井庫治

七 特色・所見

獅子神楽は他の地域でもあるが、万才を伴う神楽はここを含めて県内でも三カ所しかない。中断しているがなんとか復活してもらいたい。

(金井 庫治)

『群馬県の無形文化財』(昭和四十九年三月) 阿部孝調査
鳥さし

ああ さしたりな さしたりな 鳥さいな 見っさいな チンチク カンチク

唐太棒 おっからりと追い廻わし 人形大士のお姿を もつたいなくとも

ふし拌み やれこの調子で かんまして ああ さしてくりよと思つて 走り寄りて見たなれば 鳥はとっくにつんにげた 「どこまで逃げた」(一般の見物人が声をかける)

あの山越えて この谷越えて、信州信濃の善光寺さまの お堂ががくりが堂に 鳥一羽

とまった ああ さしたくりよと思つて 走りよつて

見たならば 十と二、三なる お小僧が 経読んでござつた 「なんと読んでござつた」

(一般の見物人が声をかける) ええほええさし あのとさりさしたれば ばちがあたるべ

えと 経読んでござつた 「なんのばちがあたるべえ」(一般見物人が声をかける) 天

神様梅鉢 大神楽は曲ばち ばあさんばちは 古ばち 娘のばちは ばちばち 「おっ

とちがった 手をすり 足をすり」(見物人の声)あら あら あらすりばちと すこくつ

において まだ日は 初日 二日もまいりましょう ふたば峠に とまりをなして あ

ああ さしたくりよと はしよつて見たならば 長野道中で もちがかれた かれたる

もちを こいて捨て 腰につけたる 印ろうのもちを 口中へ入れて むしゃくしゃか

んで かんだるもちをうらほへつけて うらほへつけて うらほのもちを 元ほへこい

て 元ほのもちをうらほえこいて こいてむしようのいって まだ日は二日 三日参り

ましよう三つみみづく みかんの枝に とまりをなして ああ さしたくりよと思つ

てはしよつて見たならば さおはみじかし 小鳥は高し 長いさおでさしたくりよと 思つ

てはしよつて見たならば 鳥はとっくにつんにげた まだ日は三日 四日もまいりし

まよう 四つよたかという鳥は おけちな鳥で 日さへふれば ほんじよの土手をこ

つま街道 しよじよな しよなと しなめくやつは

てんか いたちか きつねか たぬきか たぬきの目だまは古めかし かさをかぶして

とつてやろう

(歌) おおかざきじょうんじつしゅうしゅう

おつかざきじょうんじつしゅうしゅう

おつかざきじょうんじつしゅうしゅう

おつかざきじょうんじつしゅうしゅう

おつかざきじょうんじつしゅうしゅう

てんか いたちか きつねか たぬきか たぬきの目だまも 古めかし
かきをかぶせて とつてやろう

岡崎 ジョンジョロ ショ
岡崎 ジョンジョロ ショ

おっと おさえた にがすな にがすな 大きいぞ ああ いたい かじられた
見てくれ なんともなっていない どおりで いたくなかった あらあら

ことりは 山へすつとんだ こりこり 木こりが娘は 年は十六 まだ齒は白
千成軍成 千秋楽とは 舞い納め

太々神楽の歌(役員、区長、旧家は最初から歌う)

千早振る神代の昔素戔嗚の イヤマダ イヤマダ

命と云ひし大神天の岩戸へ引籠る イヤマダ イヤマダ

其の時四方の神々集りて

太々神楽に笙の笛 イヤマダ イヤマダ

アラ面白や大神天の岩戸を押し開く イヤマダ イヤマダ

いざや神楽を舞いらする

此処ら高天の原なるぞ イヤマダ イヤマダ

アラ面白い神遊び

天竺の七曜の星は曇るとも

我が氏国は曇り掛けまじ芥子程も イヤマダ イヤマダ

三尺の御幣を以て悪魔払い(一般の家はここから歌う)

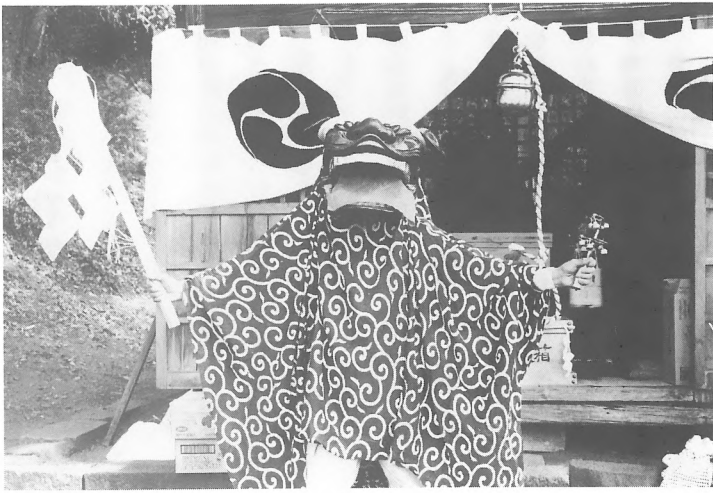
朝日さす夕日輝く其の下に小判千枚数千枚

(調子を変えて)

咲いた桜になぜ駒つなぐ

駒が勇めば花が散る ヨイヨイヨイヤサ

太平楽とは舞い納め



岡谷太々神楽 熊野神社



太々神楽 (太夫・左) と野郎万才 (才ぞう・右)



太々神楽 熊野神社
口から出ている赤い布は舌のわけ

ひらいで 平出歌舞伎

一 伝承地

利根郡白沢村は群馬県の北部、沼田盆地の東に位置し、明治二十二年に平出をひらいではじめとした七つの村がまとまり白沢村が誕生した。平出地区は五十戸足らずの集落で、稲作を中心として、雨除トマト、ウド、コンニャク、野菜栽培が盛んな純農村である。

旧沼田町を中心に利根郡内各地に、戦後、昭和二十三年頃より地芝居が盛んに行われるようになり、一時期は天狗連と呼ばれる各座のコンクールまで行われた。その中で唯一残っているのが平出歌舞伎である。

もともと、当平出地区も江戸時代から昭和の戦前までは折りにふれて地芝居が演じられていたことは、神社の境内に舞台（舞殿）があり、今は取壊されていないが引幕や大道具、絵襖等が残っており現在利用されているものもある。

二 上演の時期及び場所

戦後、昭和二十四年に復活した当時は四月二十三日の蚕影山神社の例祭に奉納芝居として、青年会々場で数年続けて上演したが、昭和三十年代はしばらく中断し、昭和四十二年に白沢村の敬老会に依頼され小学校の体育館の公演を切掛けに、昭和五十七年に白沢村文化協会ができ、発足と同時に文化協会主催の芸能発表会に、平出歌舞伎保存会として上演以来、小学校の体育館で村の敬老会と併せて毎年上演、平成三年より役場庁舎三階の団地センターにて毎年行われている。

三 行事の次第・構成・演目

戦後、復活した当時四月といえは農作業も比較的暇で、お寺の本堂で一週間か十日ぐらい月夜野から善さんという師匠を頼み稽古をしたが、昭和四十二年頃からは、青年会場または新しい集会所等で毎年五月第二日曜日に行われる敬老会及び芸能発表会の出演に備えて会員の都合を計り十日か十五日ぐらい稽古する。

また、利根沼田古典芸能祭（三年に一回）、群馬県地方歌舞伎県民会館公演（三年に一回ぐらい）に出演、過去においては埼玉県小鹿野町教育委員会より依頼され、平成五年と平成八年に小鹿野町文化センターの公演に参加、平成五年埼玉民俗芸能埼玉県岩槻市県立民俗文化センター公演に参加。

設備、大道具、について、主に公民館や文化会館等のステージを使用するので、俗に地方でよくいわれる二重のセットは会員の内に器用な人がいて、組立式で移動が可能なものをつくり、大道具等は昔からのものを使い、衣裳かつらは、沼田から借りる。

演目については、古老たちから受継いだ幕を稽古して上演するように心掛けていく。主な演目は、太功記十段目、奥州安達原文治館、奥州安達原袖萩祭文、鎌倉三代記三浦別れ、玉藻前曦袂金藤次上使、一の谷嫩軍記熊谷陣屋、菅原伝授手習鑑寺子屋、忠臣蔵七段目、ひらがな盛衰記源太勘当、御所桜堀川夜討弁慶上使、義経千本桜屋等であるが、その内いくつかは、義太夫の語りと特に三味線が確保できないため不能な幕もある。

四 組織

組織については、古老たちの話によると昔は子役か特別な役以外は男性ばかりだったときいているが、現在保存会員は男女半々ぐらいで、主として平出地域内の在住者と場合によって当地域出身者または白沢村在住としている。

現在の会員として

| | |
|-------|-----------|
| 小野信太郎 | 六十四歳（代表） |
| 小野秀夫 | 六十六歳（副代表） |
| 小野徹夫 | 五十七歳（会 計） |
| 乗原正明 | 五十歳 |
| 金子敏男 | 四十七歳 |
| 乗原みき子 | 五十歳 |
| 小野ヒデ子 | 五十一歳 |
| 小林ヨミ | 五十二歳 |

新井治江 六十歳
常木一子 五十九歳

五 由来

江戸時代から昭和の初期頃までの生活の中での庶民文化としては、当地区においても、盆踊りを除いては、義太夫と地芝居が最も盛んだったようで、神社の境内に舞台もあり、明治時代頃まではこの地区でも壮健組という組織ができており、当地区でもその壮健組が中心になり、農閑期をみて、地芝居を上演する時は三日間ぐらい大々的に行ない、なお、当時各地区の壮健組とおつき合いとして「壮健ばな」も多額なものだったので、そのお返し物等も幅をきかし中々大変だったとよく古老たちから聞いている。

その古老たちが、当時、官憲に監視されながら、またなにかと制約されて来たのが、戦後まったく自由になり、義太夫の連稽古を切掛けに、昭和二十三年四月当地区の番影山神社の祭典に奉納素人歌舞伎として復活、上演したのが平出歌舞伎の前身である。昭和二十年代はよく上演したが、三十年代一時期中断し、四十二年に白沢村の敬老会上演、それを切掛けに断続的に上演、昭和五十七年に白沢村文化協会が出来、平出歌舞伎も入会と同時に平出歌舞伎保存会と改めた。

六 記録・文献

特に記録文献等はないが、明治十二年から明治三十年代頃までに作製し、使われた台本が地区の壮健の所有によって残っている外、群馬県民俗調査報告書「白沢村の民俗」に収録。

七 特色・所見

一般的地方に伝わる地芝居ではあるが、戦前、戦後を通して古老たちから伝えられておぼえた素地を大事に受継いでいる。

また、平成二年には長年の活動内容が認められ、群馬県文化奨励賞を受賞している。

(小野 信太郎)



[平出歌舞伎]



〔平出歌舞伎〕

あおき すながわ
青木・砂川人形 (あおすな 青砂人形)

一 伝承地

利根郡利根村の青木、砂川地区に伝わる。この地区は赤城山の北面、赤城川の下る傾斜地の小さな谷に営まれる山村地域で、青木・砂川合しても五十軒たらずといふ小さな集落である。しかしここには、隠れキリシタンの影響を受けたといわれる、屋根に十字の白木をあげる特殊な風習や、砂川の石田家は石田三成の子孫といわれ、三成の落人説もいわれる特別な歴史を感じる所でもある。

二 上演の時期及び場所

詳細については不明である。昭和二十八年頃、萩原進氏らによる赤城根村誌編さんの民俗調査の時に、中断していたこの人形芝居を発見して、数人残っていた人形芝居関係者を中心に上演がなされたという経緯があるが、その時すでに上演期、場所等についてはっきりしたものがあったといわれる。民俗調査の後、昭和二十八年より数年、再びこの人形芝居が上演されているが、定期的には春で、昭和三十年弥生、南郷小学校、五月五日に砂川の石田貞治家で演じられたことが記録されている。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

この人形芝居の構成、芸態等について、昭和三十二年発行の『郷土芸能と行事、群馬』萩原進（煥平堂）に詳しく記載されているので以下引用させていただく。

「この人形も素朴な一人遣いの豆人形であって、先ずカシラから調べてゆくと、大体江戸あたりから購入したものとかわれ、顔面だけが三寸位のが並みである。串は短くて、尖端は指にはさんだ時抜けないようにすべり留めの装置を目的のためになっている。湧丸などの人形カシラと違い、その中のいくつかは、眉毛や目が動くようになっており、小さいながらも精巧を極めていものである。この眉毛などを動かす仕掛けの糸は、串の中を通して、左手の親指など巻きつけて使うようになって

ている。カシラの種類は一通りは揃っており、老け役カシラなどにはなかなかよいものがある。大体三十数個はある。

このカシラを右手の中指と人差指の間にはさみ片手で使う。右手の親指と小指にはそれぞれ独特の補助器になっている人形の手をつけるが、この手は銅線をもって螺旋の輪をつくり、これに指をはめるようになっていから実演中でも人形の手が脱げ落ちないように工夫されている。胴輪に当るものは、衣服陳列に使う人体上半身に似た形に、種紙と布をつけてつくり、右手をこれに差し込んで衣裳を着せるのである。衣裳もそう高価なもの少なく、ほとんど手製のものです、時代物に使う甲や冑などだが、素朴な村人の手によって作られ、それに金紙銀紙を貼っている程度のものである。全長大きいもので一尺二三寸しかない。

舞台は矢張り組立式のセットによる掛舞台で、主として民家の座敷用にできている。側面から見ると、舟底、二重、遠見の順に、天井から釣り下げるか或いは、僅かの柱を立ててそれに組みつけてゆくもので別にこれという独特の工夫はされていないようである。現在は演出の時に電燈を使用しているが、原則としてローソクの光でやるのを本体としている。

人形の遣い方は右手で人形を支え、人形だけを観客席に見えるように、遣い手は舟底に片膝立てて座り、左手を補助にして畳の上をすり歩きながら行う。純然たる突込み遣いである。もし場面によって、人間が二重に現れる時には、下をくぐって二重に出て操る。場合によっては、遠見の前まで動くこともある。舞台の飾りに用いる襖や背景なども、すべて遠近図法を採り入れ、舞台が奥深く見えるようにしているのは他の場合と全く同じである。」

衣裳、道具類

衣裳……着物多数あり 小道具……刀、蓑座、弓など

人形のカシラ……古いもの 十三頭 新しいもの 十頭

人形指手……十二組

幕……水幕二枚 引幕一枚

掛舞台……一枚 掛紙(背景)……三枚

義太夫本 十数冊

演目と配役

○一谷嫩軍記

組打の段

熊谷次郎 角田紋十郎

平山 角田銀作

玉織姫 石田友治郎

小次郎 角田勇作

敦盛 石田一男

○傾城阿波鳴門 順礼唄の段

お弓 紋十郎

おつる 銀作

飛脚 勇作

○繪本太功記十段目尼ヶ崎の段

武智光秀 紋十郎

操 勇作

皐月 一男

十次郎 銀作

初菊 友治郎

久吉 根津子之松

(配役については残っている義太夫本に書かれているものを参考とした)

当時の座員は

青木——角田紋十郎(紋重郎) 角田勇作 角田寅次 角田久男

砂川——石田貞治 石田一夫(男) 石田友治郎(次) 笛田銀作

根津(笛田)子之松

大夫——竹本鳴枝大夫 竹本隣大夫(永井)

竹本住花(月夜野) 小野正市(平出)

○玉藻前囃 袂道春館の段

鷲塚金藤次 勇紋

萩の方 紋勇

桂姫 銀作

初花姫 友治郎

采女之助 //

(角田紋十郎と角田勇作が金藤次と萩の方を交互に操ったと思われる)

○奥州安達原袖萩祭文の段

袖萩 銀作

謙杖 一男

お君 友治郎

貞住 紋十郎

宗住 久男

四組織

組織について詳細は不明であるが、青木の角田氏、砂川の石田氏がこの人形の中であったことが遣い手の配役、聞きとりなどより伺える。

(○印人形関係者)

青木

角田栄治郎

角田紋重郎——良太郎(現当主)——光雄、邦次、勝、喜久恵、登、ひろ子、敏男(兄弟)

みさ——信夫——巖(角石工業)

角田紋作——勇作——久雄

つま——喜重郎

砂川

石田貞治

忠次郎(現当主)

好秋

幸雄

辰雄

しげる

実

まさる

かおる

さとの

たける

石田勝治郎——忠治郎——淳治

つま(角田紋作妻)——皇太郎

みさ(角田栄治郎妻)

五 由来及び付近の類似芸能

由来について詳しいことは残っていない。時代的には頭の古さなどから江戸時代末あたりと見るのが妥当と考えられる。

一人遣いの人形芝居として現存上演している例として沼田市沼須町の沼須人形芝居があるが、頭の大きさ、遣い手の親、小指に人形の手をつけるなど類似する点が多い。その他吾妻郡吾妻町の大沢人形芝居の操法が近いといわれるが、大沢人形も廃絶して比較することが出来ない。

六 記録文献

『わが赤城根村』 昭和二十九年発行

『郷土芸能と行事、群馬』 萩原進著 昭和三十二年発行（煥乎堂）

七 特色・所見

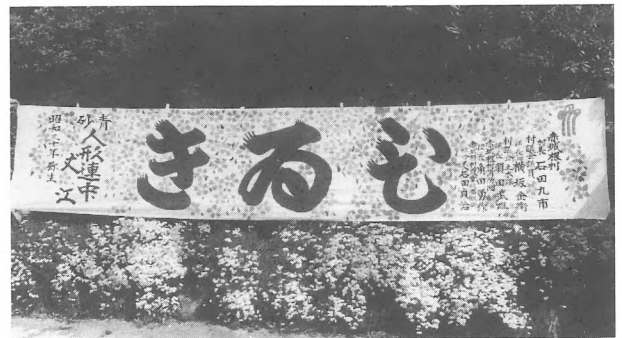
赤城山周辺に残る人形芝居の一つで、人形の指、手造りの頭などを見ると、大変素朴で地区に正に生づいて来た芸能であるという感じがする。しかし萩原進氏の赤城根村誌の民俗調査後、この郷土芸能に関してまったく継承、保存の手が施されていない。当時の関係者もほとんど亡くなってしまっている。

だが、石田家に保管される損傷の激しい、人形の頭、諸道具を見るにつけ先人の伝えた文化を何らかの形で残さなくてはならないと深く感じてならない。

（金井 竹徳）



小さな谷あい営む砂川地区



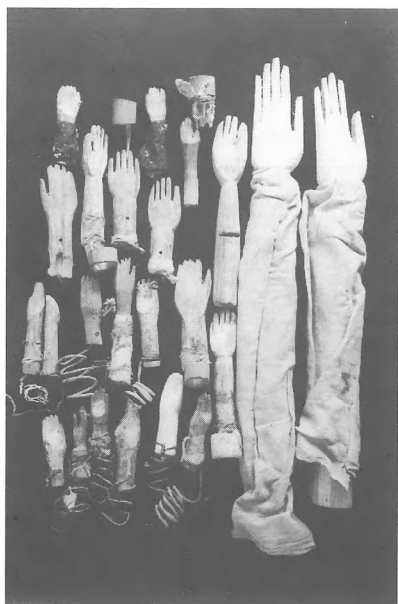
奉納された のし幕（幔幕）
赤城根村長の名も見える



人形の頭 新しく造ったもの



人形の頭 古い時代のもの



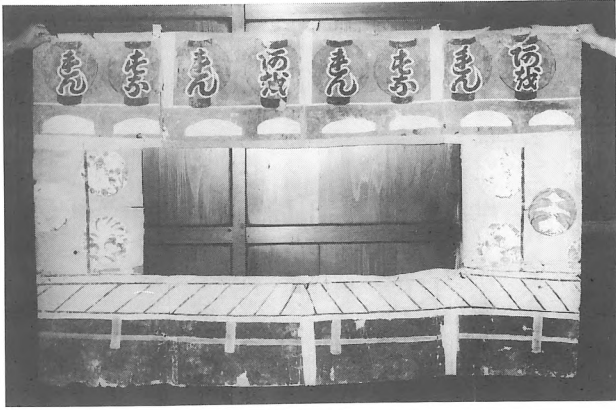
人形の手 螺旋状の輪が珍しい



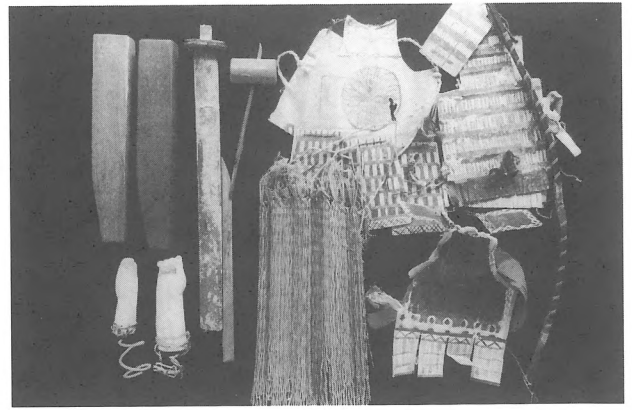
人形の頭と手をつけた所



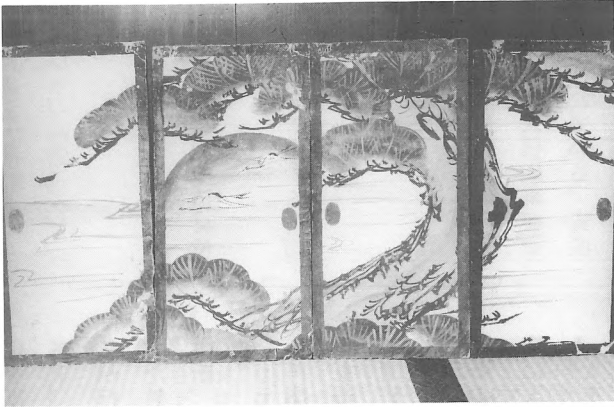
綺麗、鳴門の順礼おつるのもの、
背に手が入るようあいている



二重を現わす掛舞台



拍子木、鎧、弓などの小道具



掛紙 鶴と松で三番叟に使ったものか



義太夫本



掛紙 花模様

太郎の念仏講

一 伝承地

利根郡川場村川場湯原太郎地区に伝わる。太郎は川場村の北部、薄根川上流に位置し、念仏の行われる大日堂は地区のほぼ中央に建てられている。

ここは信仰の山、上州武尊山への登山口にあたり、同山への安全を祈願する雲切の不動尊なども祭られている。

二 上演の時期及び場所

古くは春秋の彼岸の入りと明け口に行つたが、現在は春秋の彼岸の中日のみに行つている。念仏の行われる大日堂には康安二年（一三六一）銘の胎蔵界大日如来が安置されており、地区の家内安全と子育てに御利益ある仏として知られている。安産の祈願は特に盛んで、赤飯や子供の腹掛けなどがお参りのお供え物としてよく奉納されている。

なお念仏はこの大日堂で行う外、地区の葬儀の際にも、その家で本葬の後に行われるが、その時は二つある鉦のうち大きい方の鉦が使用される。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 夕食後の午後七時半頃に、世話人が木杵に下がった大きな鉦をたたいて合図、その頃にそれぞれ一軒につき一人は必ず、一軒で何人でもかまわなく地区の人達が集まる。

大日堂に入るとまず大日様の前で線香を立てて、日頃の家内安全のお礼の参拝を行う、そして車座になり、近所の人達と天候や作物のことなどの世間話などで始まりを待つ。ほとんどの人が集まると、それを確認して伍長さんが挨拶、太郎念仏講中伝誦唄と書かれたテキストなどが配られ大日様の方に向けて整列する。

音頭とりと呼ばれる地区の長老が数名最前列に並び、大小の鉦を用意し準備、一般の人々は大きな数珠を手にして車座になり音頭とりの斉唱を待つ。音頭とりは準備を確認してから大小の鉦を打ちつつ、念仏を唱え始める。「ナムアミダミナムアミダミ、ナムアミダミナムアミダミ」を最初に十三仏、十王、そして善光寺まで念仏が行われ、一般の人達は音頭とりのあとに続く、斉唱をしながら三百四十個のついた数珠を右まわしで送り続ける。年によって異なるようだが、三つ程終えた所で中斷、十分かく十五分程の休憩が入る。この間お茶を飲んだり、場所を変えたりする。

再開して六観音、道端六地藏、岩舟地藏、融通念仏、薬師と続け、最後に差上念仏を斉唱して終了する。伍長さんの言葉があり、数珠をかたづけ、大日様の格子など閉じられ念仏は終えるが、その後野菜や漬物などが何カ所か配られ、またお酒などがふるまわれて世間話などが始まる。

昔は念仏のあと、ジャガイモ、インゲン、切りコンブなどを煮しめ、それらを重箱に入れて伍長が用意して食べた。現在でも念仏の後の世間話が楽しみであるという。

(2) 大日堂は二間半四面の中に厨子を安置させるだけのものではあったが、明治初期頃に増築改修して、間口四間半、奥行三間半の寄棟の建物になった。これは住民の集会などに使えるよう増築改修したためである。

厨子は総ケヤキの前流れ造りで、江戸時代中期の造りといわれる。格子四枚で仕切られている。

(3) 数珠の長さは全長十一・四九メートルで三四〇個の数珠がついている。

鉦は二個あり、大きい鉦は直径四〇センチ

銘は「上州上川場村 施主村中、享保四歳 四月吉日」

小さい鉦は直径二〇・五センチ 銘は「宗味作 当ら尾村」

(4) 念仏の誦詞については「太郎念仏講中伝誦唄」が冊子として作られている。昭和四十三年春彼岸に作られたものは次の通りである。

川場村湯原 太郎念仏講中伝誦唄

ナムアミダミナムアミダミ

ナムアミダミナムアミダミ

ナムフドウ シヤカ モンジユ フゲン
ジゾウ ミロク ヤクシ カンノン セイシ
アミダ アシク ダイニチ コウクゾー

十王

十オオタイナムアミダ (二十回)

善光寺

ミワココニ ミワココニココロワシナノノ
ゼンコウジ オタスケタマエヤシナノノ
ニヨライ ナムアミダンブツナムアミダ

以下 別記(資料あり)

四 組織

太郎地区には現在二十二戸の軒数があり

(津久井五、金子四、入沢四、角田二、田中二、他に松井・原沢・永井・今井・竹沢が各一軒ずつ)

その年の伍長が中心となり念仏については取仕切る。

音頭とりは地区の長老で別に決まっていな。音頭とりの近年の流れは次の通りである。

入沢たま (八十歳以上までやった) — 入沢金寿 — 田中喜宗太 —

角田二三二 — 金子東 — 金子利雄 (現在)

平成八年度の伍長 金子寛一 川場太郎一〇八八

TEL〇二七八 (五二) 二〇七九

五 由来及び付近の類似芸能

この念仏の行事は相当古くから太郎地区に行っていたと伝わる。明治三十三年に大日堂の改修の時すでに念仏が行われていた。

その頃はこの大日堂に宮守が住んでおり、なにかと世話をしたといいい伝わっている。また以前は前日より布団などを持ち寄ってお籠りをした時代もあった。

六 記録文献

太郎念仏講中伝誦唄

昭和四十三年

念仏贊^{ズン}仰会

七 特色・所見

二十二戸の小さな純農村地区であるが、この民俗的信仰行事を全戸協力のもとに春秋欠かさず行うことで、地区の結束が実に堅く、村で行う運動会あるいは野球大会など、少数にもかかわらず常に優勝候補で現に何回も優勝しているという。単純な信仰の形態ではあるが、それがかえって今日では貴重な郷土民俗芸能の一つにあげられるのではなからうか、和気あいあいとした中での結束したこの行事が未長く続いて欲しいと思う。

(金井 竹徳)

川場村湯原「太郎念仏講中伝誦唄」

ナムアミダーナムアミダー

ナムアミダーブツナムアミダ

十三佛

ナムフドウ シヤカ モンジユ フゲン ジゾウ ミロク ヤクシ カンノン セイシ

アミダ アシク ダイニチ

コウクゾー

十王

十オオタイナムアミダ (二十回)

善光寺

ミワココニ ミワココニ ココロワシナノノ

ゼンコウジ オタスケ タマエヤ シナノノ

ニヨライ ナムアミダンブツナムアミダ

六観音

ロクカンノンニ ロクジゾウ トナエモウシテオイトクニ 十六セキオノガレモウシテス

グニジヨウドニナムアミダ

道端六地藏

ミチノハタノロクジゾウ トナエモウシテオイトクニ ナム十オオ二十三ブツ サンゼノ
シヨボサツナムアミダ

岩舟地藏

イワフフノ オジゾウサマトオナエモウシテオイトクニ 四十八ツセキオノウガレモウシ
テスグニジヨウドエナムアミダ

融通念佛

ユウズウネンブツ一ペンモウセバ ゴクラクノジヨウドガ イケノレンゲノハナツボミ ヒ
ラキヒカリジヨウドノライコウハ ヨイニミヨウジヨウヨナカニホケキヨウ アカツキミ
ヨウジヨウノナムアミダ

薬師

ロクカンノンニロクジゾオ チチブヤクシハツセノカンノン ナム十五二十三ブツ サン
ゼノシヨボサツナムアミダ

差上げ念佛

コンバンモウシタオネンブツ ココニタントアラタメテ コガネノオボンニツミアゲテ ア
ミダサマヘト(ダイニチサマ) サシアゲテ オイトマモウシテイザサラバ ナムアミダン
ブツナムアミダ

昭和四十三年春彼岸

川場村湯原太郎

念仏賛仰会

以上

田中喜宗太

入沢 善次

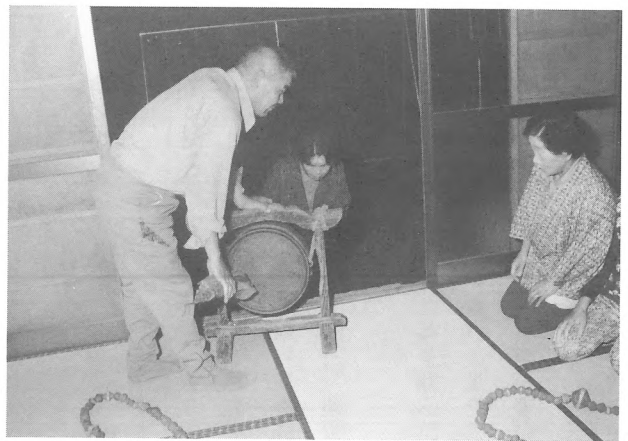
金子 傳太

右念仏講伝誦唄保存発願者

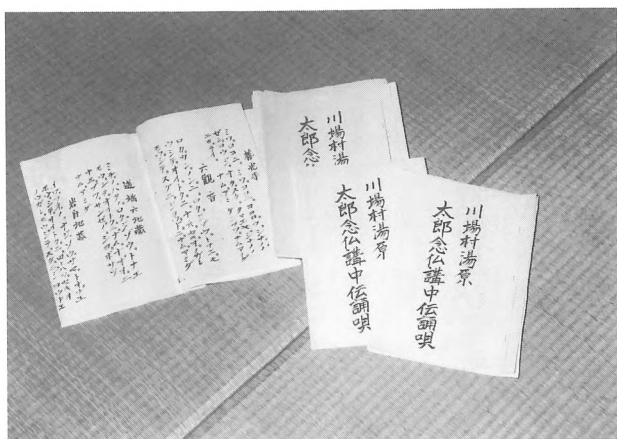
金子 利雄



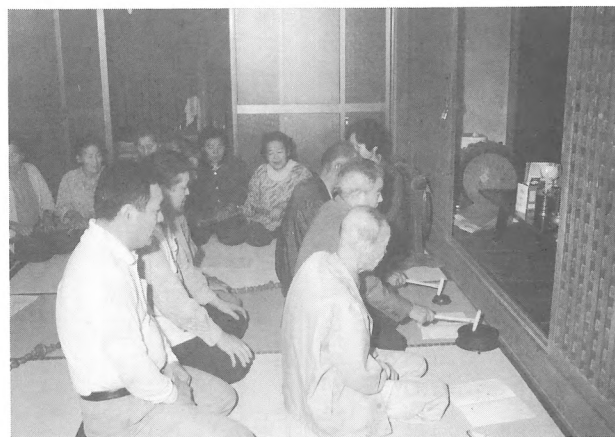
集まって来た人達はまず大日様にお願主をする



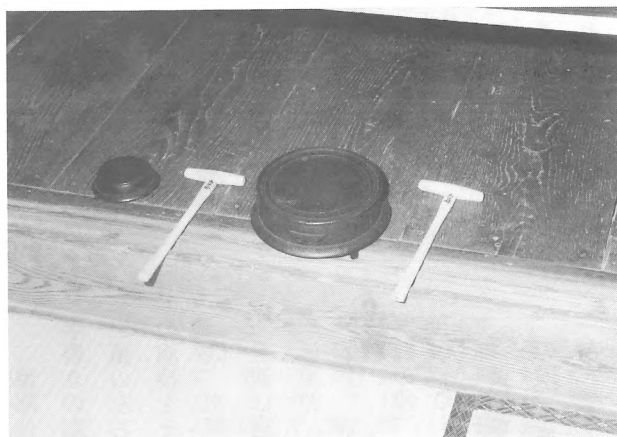
集合の合図を、木杵に下げられた大きな甕をつかって行う



「太郎念仏講中伝誦唄」



音頭とりを最前列に後方数珠を持つご婦人たち

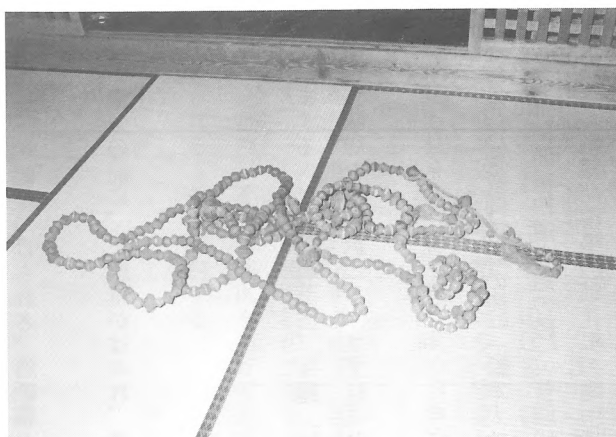


大小の鉦

小さい方の銘 宗味作 当ら尾村
大きい方の銘 上州上川場村 施主村中



音頭とりは大小の鉦を打ちつつ念仏を唱える



340個の珠のついた数珠 長さ11.49メートル



340の玉が連なった大きな数珠を誦唄しながらまわす女性たち

こめまき 古馬牧人形（しももく） 下牧人形

一 伝承地

昭和三十年、旧古馬牧村と旧桃野村が合併し、月夜野町が誕生したが、町の中央を流れる利根川の東岸、三峰山の西麓に細長く位置するのが旧古馬牧地区である。そしてそのほぼ中央に下牧はある。

下牧の地名は、古代の長野牧につながり、当時下牧は広々とした牧場であったといわれる。

二 上演の時期及び場所

昭和三十七年以前は、鎮守である牧野神社の舞殿で例祭日である四月十五日に上演されていたが、昭和三十七年に舞殿が火災で焼失したため、それ以降は下牧公民館で上演するようになった。

現在上演の定例日は、牧野神社の例祭日の四月十五日と、四月の第二週の日曜日に利根、沼田文化会館で行われる「利根、沼田伝承古典芸能祭」への出演である。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 操法

三人遣いの人形芝居で、カシラの心串と人形の右手を操る主遣い（シン遣い）・左手を差し金によって遣う、左遣い・そして足遣いの三人によって操る。人形の足の部分は、男役の場合、鉄製の把手が足のカカトに着装されており、それを主遣いの動きに合わせて操作。女役の場合は、着物の一番下の部分に、布を丸めてつくった玉を着装し、その玉を人差し指と中指ではさみ、裾さばきの要領で操作する。

(2) 設備、舞台

演技の舞台は屋敷の外の部分の下座と屋敷内の二重と呼ばれる部分に分かれ二重は一段高く造られる。縁側の中央部分が切り込んであり、そこから下座へ出入り出来るようになっていいる。

二重部分は柱を組んだ屋敷内で、背景には襖ふすま絵がつけられる。唐紙幕と呼ばれ、手書きの布製など数枚あり。

二重の左右は袖幕がつけられる。下座の部分の前に、下座幕がはられ、操り手は外の演技をその間で行う。

(3) 次第

上演は座長の口上より始まる。口上の文句は

「東西、ここもと、ごらんいきょううしまする人形浄瑠璃芝居、外題（絵本太功記十段目）つとめまする大夫（竹本……）三味線な（鶴沢……）まずはこれより（尼ヶ崎の段）そのため口上東西、東西」

(4) 演目

「御所桜堀川夜討弁慶上使の段」「伽羅先代萩政岡忠義の段」「絵本太功記尼ヶ崎の段」「奥州安達原袖秋祭文の段」「玉藻前あまひ曦あまひ袂道春館の段」「菅原伝授手習鑑 寺子屋の段」「鎌倉三代記三浦別れの場」「傾城阿波鳴門順礼唄の場」

(5) 頭、道具類

| | | |
|----|-----------|-----------|
| ○頭 | A 立役頭 一二個 | B 老け役頭 五個 |
| | C 女形頭 七個 | D 子役頭 四個 |
| | E 茶利頭 三個 | F 梨割頭 一個 |
| | G 変り頭 一個 | 計三十三体（首） |

○楽器類

| | | |
|-------|-------|------|
| 大太鼓 一 | ×太鼓 一 | 銅鑼 一 |
| 三味線 一 | 拍子木 一 | |

○幕

| | |
|--------|--------|
| 引幕 五張 | 水幕 三張 |
| 蹴込幕 六張 | 下座幕 二張 |

○小道具

| | | |
|------------|----|------|
| 刀、懐剣、槍 | 長刀 | 弓 |
| 傘 扇子 烏帽子 | 陣笠 | 釣瓶井戸 |
| 鏡台 櫛箱 長柄銚子 | みの | 位牌 他 |

四 組織

昭和二十八年、人形の頭、三十三個が県指定を受けたことにより、古馬牧村長を

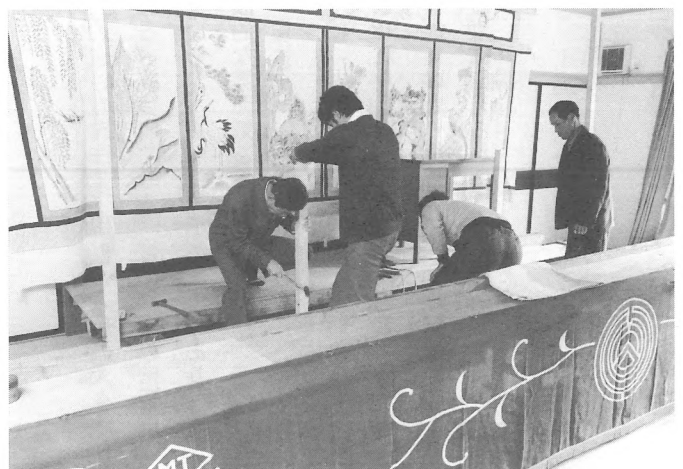
古馬牧人形（下牧人形）187 頁は
個人情報が含まれるため非公開



老人会で上演・古馬牧人形



鳴門を演ずる人形師



舞台づくり



人形の手



人形の頭



人形の頭



人形教室

武尊神社太々神楽

一 伝承地

利根郡水上町武尊神社に伝わる。武尊神社は、水上町粟沢の利根川右岸の山間部に祀られている。

二 上演の時期及び場所

神社の例祭に神楽奉納をした。戦前は旧二月二十五日、戦前から戦後にかけて四月十八日になったが、雪がまだ残っているので四月二十六日にした。大雪のため四月二十六日も奉納できなかった年があったので、昭和五十九年から祝日で人も集まり雪も消える五月五日になり今日に至っている。

神社から一段下がった所に神楽殿が建てられている。二階造りで間口十六尺奥行二十尺、神社の位置が高いので神楽殿を高くしてある。大正時代に再建した。元は神楽殿はなくて、割拝殿を利用し、割拝殿の片側を舞殿として使用した。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

(1) 祭礼行事全体の次第、全体の実演は無言が多く囃子方で進める。唱え詞は大蛇退治の時に歌う。他は全部囃子の笛と太鼓により進められる。稽古は四月十七、八日頃から始める。最初に集まった時に役割と稽古日を決め、二十日か二十一日頃から五日間夜稽古をする。稽古場所は栗沢会館である。祭当日は、午前十時三十分から夕方四時までかかる。昭和二年の時の師匠は真庭正雄で、師匠宅で稽古した。二代目は真庭市郎でやはり自宅稽古をした。三代目桑原翠の時には会館でした。現在が四代目で真庭巳千男、夜八時から二時間ほど稽古をし五月四日が総稽古と祭りや神楽奉納の準備に入る。

(2) 設備・道具神社の石段登り口右側にトタン屋根の神楽殿がある。二階で舞うが二階は二間半四方の板敷で東西南が空き、注連縄と幣束が下げられる。北側裏が楽屋で囃子方がいる。昔は道具類の保管は座長宅で、現在は会館に保管する。面は

十六で沼田の中町岡本屋(斎藤一郎)へ頼み作ってもらった。おかめ、翁、えびす、おどけ、ひつとこ、たけみかづち、羯鼓(二面)、すさのお、天狗、鍛冶屋の弟子(鬼面)、天照(女面)、浮橋(女面)、天狐(二面)、大蛇などがある。紐によって顔に付けるが、口でくわえるのが狐のオスだけで、これは口が動く。すべて桐材である。かつらは四(黒二、白一、茶一)、他に弓、矢、刀、槍、鉞、薙刀、鈴、剣、釣ざお、麻、笏など、綺羅は桑原さだ(大尽)が作った。青い袴(二)は二代目真庭市郎の時に役場から寄付された。

(3) 役名・扮装・楽器 猿田彦は天狗の面を付け鳥兜をかぶり、上衣は装束下衣は袴に白足袋を履き、槍鉞を採る。天の浮橋のイザナギ(男)とイザナミ(女)は鉞と鈴、幣束と鈴を採り、かつらを付ける。新人がやる役である。羯鼓は、天の太玉の命と天児屋根命の二神が舞う。右手に鈴、左手に扇子を採る。この役も新人がする。昔は鼓を付けていた。おかめ面は、天の鈿女の命で鈴と幣束を採る。手力男は、面はきつい顔のかつら付きで笏、注連縄、鈴を採る。天照皇大神(大日靈貴)は、手力男の手で天の岩戸隠れの天照大神が岩屋を出る舞い、一面は女性用でかつら付きで鏡を採る。鍛冶屋(天目一箇神)は、親方と弟子で面は弟子がオニ、採り物は親方は太刀と小槌、弟子は大槌である。両刀は、刀を鍛える経津主命の舞で面はきつい顔で、剣二本と太刀と鈴を採る。昔は青い野袴であった。天狐は、白狐二匹の舞で面は狐、鉞、鈴、幣束を採り、くろぬりなどをする。種蒔は、農業神としての舞でにぎの命の舞で途中に「興舞」が入る。烏帽子を付け種の入っているマスで、たんざくに種を(モチ)まく。弓の舞は、たけみかづちの神の舞で、かつらを付け右手に矢、左手に弓を採る。薙刀の舞は、鳥兜を付け薙刀を持つ。稲田姫は、素戔嗚命の大蛇退治で足名椎、手名椎、奇稲田姫が共に現われる賑やかな舞である。奇稲田姫は、姫の面を付け幣束と鈴を採る、この役は新人がする。足名椎は、老人の面を付け幣束と鈴を採る。この役も新人がする。大蛇は、大蛇面を付け笏を採る。素戔嗚命は、面の中でも一番こわそうな物を使う。太刀を持ち大蛇を退治する。恵比寿(事代主命)の舞は、恵比須の面を付け、釣りざおを採り鯛や蛸を釣り上げたリ、モチをさおの先に付けたリする。舞の中に「おどけ」が含まれ観衆を笑わせる。国堅めは、猿田彦で天狗の面を付け、右手に鈴、左手に太刀を採り鳥兜を付ける。

楽器は、笛は三名(できる者六名)、縮太鼓一名、大太鼓一名(太鼓のできる者三名)、昔は鼓を使つたが今は使わない。笛がリードしていくので笛がわからないとい方もわからない。一人前になるのに太鼓も笛も十年はかかる。

鍛冶屋の舞の笛

チユーリヤチユーリヤリ トローロロリユーユー チヤリヤー ヒーヒヤリトローヒーヒヤリトローロロリトヒヤ チヤリヤリヤヒヤラ ヒーヒヤヒヤリトローヒヤロヒヤリトローヒヤリ トヒヤリト ヒヤーリ

天狐

チリトローチーリ チエラリトローチーリ ピリヒヤラーリ ヒヤラリトローロロ ピリヒヤラーリ ヒヤラリトローロ ヒヤラーリローロ ヒヤラーリローロ ヒヤラーリローロ ヒヤラーリローロ ヒヤラーリローロ トツピリヒヤラーリ ヒリヒヤラリトローロ トローロトローロリチヤーリヤ

天ノ浮橋

チコーリヤリヤーリ ヒヨロヒヨロヒヨロ リーヒヤラーリ トヒヤ ヒーヒヤラーリヒヤー リーヒヤラーリ ヒヨロヒヨロ ヒーヒヤリヒヨロ ヒヨロヒヨロ ヒヨロ ヒヨロ ヒヤーロ ヒヤーラー リートローリトローリ トーロリユーリユーヒヤ

(4) 歌詞 大蛇退治の時に「八重立つ出雲八重垣妻ごめに、八重垣つくるその八重垣を」と言うのがあるだけで、他は全部無言で囃子の笛と太鼓によって進められる。

(5) 演目・芸能 十九座ある。「太々を踏む」と言つて「フツトン、スツトコ、トン」と足を踏み、全部左に流して右に回る。すり足、はずみ足、大振、振り込みがある。猿田彦、弓の舞は踏む、手力男の舞は難しい。新人のやる舞は、簡単でのろい。

四 組織

昔は地元に残る長男でなければ教えなかつた。最近では次、三男でも出演できる。太々神楽保存会(正式ではないが)として保存に努めているが、学校を卒業すると

会に入れる。舞は座長が指導するが一人前になるには十年はかかる、一人前になれば教えることもできる。同じ役を三年ぐらいやり次の役をする。長い人は三、四十年もやっている。費用は、粟沢地区三十二戸から毎戸千円と祭典の樽代、他地区へ招かれた時の祝金で運営している。平成八年の舞子は、桑原儀重郎(奉幣大麻)、桑原満夫(猿田彦)、真庭啓と真庭高幸(天の浮橋)、真庭大策と真庭代治(羯鼓)、阿部稔(おかめ)、真庭登(手力男)、真庭高幸(天照大神)、村田茂と真庭健治(鍛冶屋の舞)、阿部房芳(両刀の舞)、中島寿美雄と真庭喜代治(天狐)、真庭健治(種蒔)、桑原一郎(弓の舞)、村田茂(薙刀の舞)、真庭健治(稲田姫)、真庭句麻二(老翁)、真庭大策(八岐の大蛇)、阿部友太郎(素戔嗚命)、真庭高幸(恵比寿)、木村栄一(国堅め)座員は合計二十六名、年齢は三十歳から六十八歳まで。

五 由来及び付近の類似芸能

大正年間までは月夜野町名胡桃の神楽連が来て舞っていた。昭和二年の冬に群馬郡大類村柴崎(高崎市柴崎町)出身の松本耕三郎が地元の人々へ伝えた。松本は明治四十四年に沼田警察署恩田駐在巡査で退職、その後硯田(沼田市硯田町)菅原神社や須賀神社(沼田市中町)の宮守、社掌として務める傍ら大類村進雄神社(すまの)に伝わる伊勢系太々神楽を粟沢住民に伝えた。松本は笛、太鼓、舞すべてできた。冬期間稽古を重ね同年三月二十五日(新四月十五日)に太々神楽の最初の舞が奉納された。同年十一月に松本が没。しかし、その甥の松本三千寿も神楽をやっており、運送業をしていたので時々沼田の耕三郎の所を訪問していた関係で、耕三郎に代わつて同四年旧正月に粟沢を訪れ神楽の指導をしている。その時の礼は十円であつた。

また、松本耕三郎は、沼田薄根地区の青年達に神楽を(現在、薄根太々神楽、硯田太々神楽として存続している)、他に利根村高戸谷産土神社にも伝えた。産土神社では大正十一年より始め十二座を舞う。

六 記録文献

○太々御神楽御樽芳名簿 御大典記念武尊神社 粟澤祭典事務所 昭和三年四月十

五日 旧閏二月廿五日 ○誓文 昭和参年旧正月二日

○招待客員芳名簿 御大禮記念武尊神社太々奉奏 粟澤祭典事務所 昭和三年閏二月二十五日

○神楽装束修繕費廻帳 昭和拾参年春祭以降 水上村字粟澤

○御神楽奉奏会計簿 御大典記念武尊神社 粟澤祭典事務所 昭和三年四月十五日

旧二月廿五日 ○御神楽稽古入費收支扣帳簿 粟澤楽連 昭和四年旧正月

○太々神楽他村出舞伝 武尊神社太々御神楽連 昭和四年度以向(降)

など昭和三年以降の樽や会計の收支関係の記録が現在まで残っている。

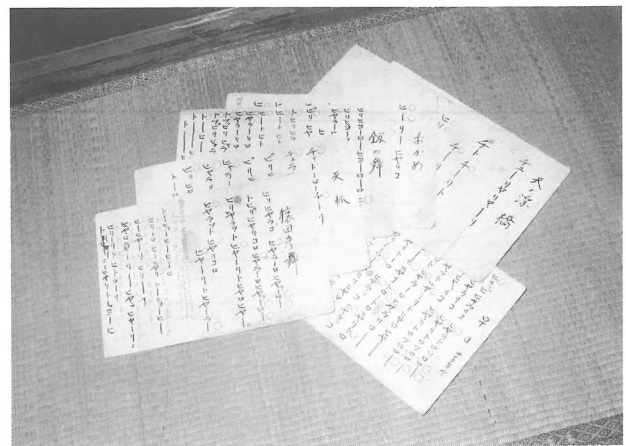
七 特色・所見

里神楽であり、若者がこの伝統神楽を後に受継ごうとしている。

(金井 庫治)



[粟沢太々神楽]



〔粟沢太々神楽〕

藤原地区諏訪神社獅子舞（師子舞）

一 伝承地

利根郡水上町藤原諏訪神社に伝わる。藤原は、水上町北部に位置し、利根川源流地域で奥利根湖（八木沢ダム）をはじめ、いくつかの湖（ダム）により「東京の水がめ」となり「秘境」から「観光・レジャー」地域へと大きく変貌を遂げた。

二 上演の時期及び場所

諏訪神社の祭典「藤原祭」に舞う。祭日は昭和十年代まで旧七月二十七日であったが、昭和十三年から新暦九月一日、戦後九月七日、同四十八年から八月二十七日、同六十一年から水上全域が盆を八月十三〜十六日になり、その翌日の十七日に祭典を行い獅子舞を奉納今日に至る。上区では神明宮（旧八月一日）、天王宮（旧六月二十五日）、八幡宮（旧八月十五日）の祭日にも奉納をしてきた。下組（下区）でも天気祭り、雨乞い、疫病除け、八朔に赤城神社で踊ったこともある。

舞台は諏訪神社から下った歌舞伎舞台を利用し、ここで踊る。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

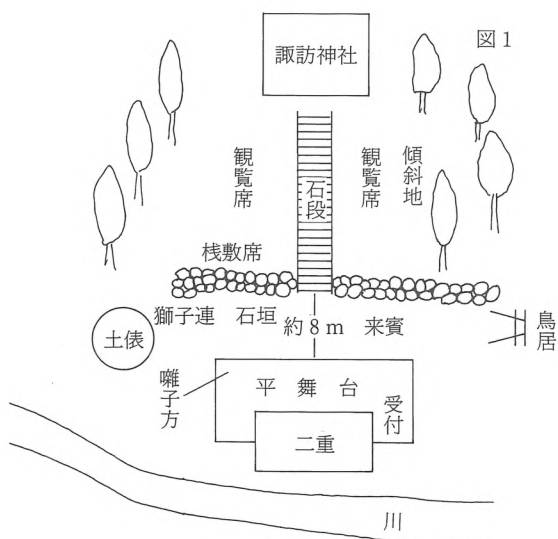
(1) 祭礼行事全体の次第 雨乞い、天気祭り、諸病悪疫退散を主として舞う。稽古は公民館で八月に入り十五日間ほど夜する。当日は午前十時から始め「角助」「小久保」「綱懸り」「望みの庭」の歌とともに踊る。

(2) 設備・道具 舞台は平地で傾斜地が観覧席になり、山頂に神社が建てられているので舞台からは神社、観覧席を見上げる形式となっており自然の地形をうまく利用している。舞台から観覧席の最前席までは約八メートルで、そこに高さ一メートルの石垣を積み敷席として幅一・八メートルを設け来賓や招待者（右側）席、獅子を引退した獅子連（左側）席を石段の左右に造っている。舞台は木造平家建カヤ葺き入母屋造り、四方は吹き抜けになっており、間口五間、奥行三間、戦後二重にした時に後方に三尺出した。戦前までは二重は移動できたが、地芝居をやらなく

なり固定した。二重は間口三間、奥行一間半で高さ五六センチ、平舞台までの高さは六八センチ。二重は楽屋で舞うのは平舞台であり、二重と平舞台の間は襖を置き、そこに本日の踊子名が書き出される。

獅子頭は桐材で長さ四〇センチ、頭と振子の頭に装着する部分とに分かれている、頭が振子の顔前方へ出ているマスク型（仮面型）である。踊子の頭に着ける部分は竹で編み輪のようになっていた。横から見ると全体が細長く見えるので龍頭のようである。頭の肌は黒く塗られている。両眼や顔の部分に金紙を貼り、鼻穴や口の内部などは朱が塗られ、眉毛や耳たぶには白色で模様が描かれている。額の捲毛に七個の乳が付いている。先獅子は、白色の線が鼻筋から眉毛の間を通り眉間にT状に書かれている。下顎には色紙を短冊形に切ったものを垂らす髭の代わりである。頭の後ろの鳥居にはニワトリの羽をさす。先獅子の頭の内部に「昭和三戊年六月」とあり、これが製作年代か修理なのかは不明である。古い頭はすっぽりかぶるキャップ型でウルシが塗られていたと考えられる。口を開き、開いた時が踊子の眼の高さになり外が見える。

(3) 役名・扮装・楽器 先獅子、中獅子、後獅子（各一人）、笛吹き二人、太鼓二



人、太鼓の二人は獅子唄を歌う。花笠一人で一組となる。舞い方を「踊子」「振り」と言う。付人は「小久保」の長唄におかめとひとつとかがボンデンやササラを持って道化した。昭和三十年頃まで出た。獅子の扮装は、頭から続く三角布を「水引き」、その先に「房(中)にモミガラ、ソバ、綿などを入れる」という三角形の布を付け、踊った時に水引が体にまきつかないようにおもりとし、三カ所に付ける。顔面に「カヤ」をたらし踊子は外が見え、見物人からは踊子の顔は見えない。上衣は水引き、下衣は袴、膝下に脛しぼりを付け袴が落ちないようにする。足は白足袋、室内で踊るので草履ははかない。手には手甲、腰太鼓は紙なのでバチで叩くまねだけする。バチは杉、ホウの木で手元には房と呼ぶ色紙が束ねてある。腰太鼓は直径二〇、高さ数センチで面に金銀紙や色紙を貼り「三日月」「三つ巴」などの模様を描き二本ずつ四本の麻縄を付け腰にしぼる。囃子方は羽織に袴、足は白足袋に早履、頭には鳥追い笠を、笠の上に紅白紙、白が一番手で赤が二番手である。花笠には菊、桜、短冊、月などの飾りを付け羽織袴に水引きをかぶる。足は白足袋に草履、腰太鼓を付ける。縮太鼓は二個、直径三〇、高さ二〇センチ。太鼓、笛、花笠を下座という。笛で舞をリードしていく。六穴で篠で作る。

(4) 歌詞 角助、小久保、綱懸り、望の庭の四曲の詞

①角助

(庭見の唄) 門の扉のくつわむし 鳴りを静めて 唄のふしを聞け 唄のふしを聞け

(長唄)

参り来て諏訪の社殿を眺むれば 黄金笠衣に綾のみとちよう
角助はみめもころも良けれども 十のれんげが二つたらん
十七がことはじめて ふじしようじ 愛の手枕引けよ十七

(いどみ)

思いもよらぬ朝霧が降りて ここで女獅子をかくしとられたかくしと
られた
なにと女獅子をかくすとは これのお庭で尋ね逢うべし 尋ね逢うべし
霧を天へと巻きあげて これのお庭で逢うぞうれしや 逢うぞうれしや

(切り) 天神林のむらむら雀羽先を揃えて 羽根をかえせな 羽根をかえせな
(引唄) 十七のすそやたもとに糸つけて しなやしなやと後にひかいな後にひかいな

②小久保

(庭見の唄) まわれまわれよ水車おそくまわりて 席に止まれな 席に止まれな

(長唄)

朝日さす夕日かがやくそのあいに 黄金造りのお宮まします
十七が宮の社殿に手をかけて 何を申すや今の若さに
しだれ柳がひきたおめ ふじしようじ これに宿れや十五夜の月

(いどみ)

十三から今まで連れたる女獅子をば これのお庭でかくしとられたか
くしとられた
奥山の沢の出口に女獅子いた なにとがなしておびき出さばや出さば
やおびき出さばや
かかるかすみも 吹き払い これのお庭で逢うぞうれしや逢うぞうれしや

(切り)

山がらが山にはなれて里に出て これのお庭で羽根をやすめた羽根を
やすめた

(引唄)

友達のつけたる太鼓に糸つけて しなやしなやと後にひかいな後にひかいな
かいな

次に③綱懸り(省略)も、庭見、長唄、いどみ、切り、引唄と続く。④望みの庭の終わりに「水上町に音も名高きこの太鼓、社内にもぎやか諏訪のお祭り、諏訪のお祭り」とあるが、昔は「ここに」であったのを昭和二十二年水上が町になったので「水上町」に変えた。

(5) 演目・芸態 「角助」は武士の奴のことである。「いどみ」は挑戦のことで、

中獅子(雌獅子)を先、後獅子がとり合う。いどみで喧嘩する時に中獅子と他の獅子の踊りが異なる。「引唄」は、舞い終わって退く時に歌う。全体が流れるような舞い方で、激しく舞う「いどみ」でも足を踏みつける時でも強く踏みつけない。囃子は三段階に序、破、急に分かれている。踊子は上体を斜め前方に傾ける。最初に出てきて時計回りにまわるが、宮まいるの意味がある。

四 組 織

昔は七歳から十四歳までの子供が舞い、身内に不幸があった時は三年間、三親等の不幸は一年間舞うことはできなかった。鳥居をくぐる事ができなかった。祭りに参加する男性は好きな食物や酒を断ち、女性の作るものは食わず祭りに備えた。女の子も女性も参加できない。上区は大沢、屋倉、湯の小屋、大芦、須田貝、明川の六集落で構成され、それぞれの集落ごとに獅子頭（副会長）と各地区に役員があり、稽古は大芦の什長（組長）宅でした。現在では踊子、囃子方などに特別の規制はなく誰でも参加できる。道具類は大芦の公民館に保管し稽古も公民館です。昭和五十九年上中下合わせて藤原獅（師）子舞保存会ができた。

平成八年の踊子と囃子方は次の方々であった。

| | | | |
|--------------|--------------|----------|----------|
| 角助 | 小久保 | 綱懸り | 望の庭 |
| 太鼓 中村 勉 | 太鼓 中島京 | 太鼓 中島賞 | 太鼓 桑原劫雄 |
| 太鼓 浅岡秀行 | 太鼓 中島人土 | 太鼓 橋本修一 | 太鼓 中島保雄 |
| 笛 中島統 | 笛 桑原劫雄 | 笛 中島京 | 笛 中島統 |
| 笛 戸塚登 | 笛 中島賞 | 笛 桑原亮一 | 笛 浅岡秀行 |
| 先獅子 野村征志(小六) | 先獅子 中島寛(中二) | 先獅子 鈴木浩仁 | 先獅子 中島修一 |
| 中獅子 中島一紀(小三) | 中獅子 中島成行(小三) | 中獅子 中村秀之 | 中獅子 中島政利 |
| 後獅子 中島充志(小五) | 後獅子 中村義之(小四) | 後獅子 中村克利 | 後獅子 中島隆典 |

五 由来及び付近の類似芸能

元は藤原地区の上、中（横山、久保、一畝田など）、下（平出、夜後）組の三組が三年に一度ずつ交代で舞っていた。一時中組が中断していたが復活した。「獅子舞ノ由来」（寛永三年沼田藩王家老橋本三太夫写夫）によると、文治五年に源頼朝病になり鶴岡八幡宮に病氣回復の祈願をし、相模小太郎義国を京都につかわし白河家の井上正兼神宮が都より鎌倉に来て獅子舞を行う。その時義国の子小平太が舞を覚え、頼朝の病気が治り日本国中へ銅造の宮を奉納、建久二年に小平太が藤原武尊神社に宮を奉納、獅子舞を教えたのが始まりであると伝えられている。

六 記録文献

『水上町の民俗』 群馬県教育委員会編

七 特色

上、中、下の囃子方、振りなど互いに少しずつ異なるが、藤原全体として他地域と異なる囃子方、踊子などの特色を多く持っている。特に「長唄」の節は独特のものである。

（金井 庫治）

角助

（庭見）

門の扉のくつわむし 鳴りを静めて

唄のふしを聞け 唄のふしを聞け

（長唄）

参り来て諏訪の社殿を眺むれば

黄金笠衣に綾のみとちよう

角助はみめもころも良けれども

十のれんげが二つたらん

十七がこしはじめて ふじしようじ

愛の手枕引けよ十七

（いどみ）

思いもよらぬ朝霧が降りて

ここで女獅子をかくしとられた かくしとられた

なにと女獅子をかくすとは

これのお庭で尋ね逢うべし 尋ね逢うべし

霧を天へと巻きあげて

これのお庭で逢うぞうれしや 逢うぞうれしや

（切り）

天神林のむらむら雀羽先を揃えて

羽根をかえせな 羽根をかえせな

(引唄)

十七のすそやたもとに糸つけて

しなやしなやと後にひかいな 後にひかいな

小久保

(庭見)

まわれまわれよ水車おそくまわりて

席に止まれな 席に止まれな

(長唄)

朝日さす夕日かがやくそのあいに

黄金造りのお宮まします

十七が宮の社殿に手をかけて

何を申すや今の若さに

しだれ柳がひきたおめ ふじしようじ

これに宿れや十五夜の月

(いどみ)

十三から今まで連れたる女獅子をば

これのお庭でかくしとられた かくしとられた

奥山の沢の出口に女獅子いた

なにとがなしておびき出さばや おびき出さばや

かかるかすみも 吹き払い

これのお庭で逢うぞうれしや 逢うぞうれしや

(切り)

山がらが山にはなれて里に出て

これのお庭で羽根をやすめた 羽根をやすめた

(引唄)

友達につけたる太鼓に糸つけて

しなやしなやと後にひかいな 後にひかいな

綱懸り

(庭見)

京でごかんの唐絵のびようぶ

一重にさらりと建てや廻れな 建てや廻れな

(長唄)

青柳の糸くり返せやこの庭で

重ね重ねに参るめでたや

玉すだれあげつおろしつ巻き上げて

奥の神様 花と見えそ

参り来てこれのお庭をながむれば

四方黄金に 升形の庭

(いどみ)

七つから今まで連れたる女獅子をば

これのお庭でかくしとられた かくしとられた

南無薬師 尋ねる妻に逢わせられ

綾のみとちよう掛けて参らしよ 掛けて参らしよ

あれ見さい 女獅子男獅子のふりう見さい

よれつほどれつ余念ないもの 余念ないものや

(切り)

天竺の天の河原の河島に出て

白石揃えてこきりこびようし こきりこびようし

(引唄)

白金の鐘戸の障子を後にひく

それを見まねて後にひかいな 後にひかいな

望みの庭

天竺の天の河原の河島に

白石揃えてこきりこびようし こきりこびようし

つばくろが金をくわえて里に出て

これのお庭の御倉木に住む 御倉木に住む

お山から切りを切りをとこのまれて

今はならわでお山三つ切り お山三つ切り

鎌倉の鍛冶が娘のはたおるは

ひようしを揃えて三びようし 三びようし

玉川の絹た打つのは面白や

ひようしを揃えてはでな女子な はでな女子な

峯の雪谷の氷をおしわけて

何を急ぐや万咲の花 万咲の花な
押してもみよや水車

ここに聞こゆはねたきの音 はねたきの音
千早ふる神も恵みて五つ草の

花にまれなる稲の豊かさ 稲の豊かさ
絹川の中の小島の姫小松

松風吹けばな そよとなびけな
水上町に音も名高きこの太鼓

社内にもぎやか諏訪のお祭り 諏訪のお祭り
(引唄)

白金の鎗戸の障子を後にひく

それを見まねて後にひかない 後にひかない

獅子舞ノ由来

(原文のまゝ)

人皇四十五代聖武天皇天平四年名僧行基ノ云フ人唐ト印度ノ国エ仏学修養ニ行キ舞踏獅子舞ノ技ヲ覚エ日本エ帰リ義淵真辨吉備ノ真備エ伝習セシム山部末人日本歌ニ修正シテ天平十一年奈良正倉院建立落生ノ時始メテ獅子舞ヲ行エリ其後各都ニ於テ毎年行ヒタリ 人皇四十九代光仁天皇山城ノ国長岡宮殿エ遷都宝亀八年獅子舞ヲ為ス事年中行事トス其後八十二代後鳥羽天皇文治五年ノ時源頼朝病ニ罹リ鶴岡八幡宮エ病氣平癒ノ祈誓ヲ掛ケ相模小太郎義国ヲ京都ニ遷シ白河家ノ小姓井上正兼神宮都ヨリ鎌倉エ来リ獅子舞ヲ行エリ 其ノ時相模小太郎ノ伴小平太ナルモノ獅子舞ヲ稽古シ其ノ舞ヲ修得シタリ源頼朝病氣全治シテ日本国中ノ大社エ銅造ノ宮ヲ始メシム 相模小平太藤原武遵神社(稻高)エ銅ノ宮ヲ奉納ス時ニ建久式年六月ナリ

寛永三丙戌年

相模小平太永ク藤原ニ在リテ獅子舞ノ舞踏ヲ教エ其時ヨリ藤原津ニテ獅子舞ヲ始メタリ

沼田藩主家老
橋本三太夫 写之



〔藤原諏訪神社獅子舞〕



〔藤原諏訪神社獅子舞〕

日枝神社獅子舞

一 伝承地

利根郡新治村の羽場、日枝神社に伝わる。羽場は新治村の入口に当る地区で、赤谷川の北側、大峰山へつながる南斜面にある小字群の集まる所である。

二 上演の時期及び場所

日枝神社の春の大祭である四月二十日に長い事行われてきたが、関係者の務めの都合で（近年サラリーマンが増えており）七十八年前より五月の三日に行われるようになった。

日枝神社は、大山昨命外五柱を祭神とし、往古、近江国滋賀郡坂元郷より延喜二年四月中の甲の日を以て日吉神社を勧請し奉った。当初宇藤塚に安置し、後に小高井に移したが、赤谷川の氾濫により、現在地、宮平に移し奉っている。

当社は沼田城主、真田伊賀守信直の再建で、利根郡二十一社の内従五位上山神大明神大山昨命、羽場村山王大権現と称する。そして明治維新の際、村社日枝神社と改称された。

三 行事の次第・構成・演目・芸態等

庭神楽獅子舞順次

大序宮詣

清々塩

梵天

三方

拍子木

笛吹

歌唄

大鼓

獅子
籠
摺

初庭
社吉利

初吉利 七座

順逆 獅子籠
歌太鼓

めぐりあふたよあとの友達 ヤア順逆よ

此宮は飛驒の内匠が建たげでくさび一つで四方しめたよヤア順逆よ
国からは急げ戻れの文が来ておいとま申して花の都へヤア順逆よ

庭見 獅子籠
笛太鼓

歌吉利 同断

十七が宮の社壇に手をかけて何を申すよ今の若さに

大入羽 獅子籠
笛太鼓

小入羽 同断

乱舞 同断

われわれは京で生れて伊勢育ち腰にさいたは伊勢の御抜よな
くるりと廻れ廻れ伊勢編笠の輪の如くよな
七夕に借りて貸すもの綾と錦かへせ七夕七夕
太鼓の胴をきりと締て、籠をさつとすりとめたよな

岡崎 獅子籠
笛太鼓

中吉利 七座

順逆 獅子籠
笛太鼓

めぐりあふたよあとの友達 ヤア順逆よ

中立の腰にさいたる小脇差鏝も目貫も黄金なるものヤア順逆よ
国からは急げ戻れの文が来ておいとま申して花の都へヤア順逆よ

庭見 獅子籠
笛太鼓

歌吉利 同断

御所代をあれて見たれば袷 葺是で見たれば綾ののしぶぎ

小入羽 獅子籠
片入羽 同断
乱 舞 同断

我々は京で生れて伊勢育ち腰にさいたは伊勢の御抜よな
くるりとまはれく伊勢編笠の輪のごとくよな

我等の習ひにや小切小拍子く

太鼓の胴をきりりとしてめて籠をさつとすりとめたよな

岡 崎 獅子籠
笛太鼓

後 吉 利 七 座

順 逆 獅子籠
笛太鼓

めぐり逢ふたよあとの友達 ヤア順逆よ

此森に鷹が住げに鈴の音

たかは住ねど御神楽の音 ヤア順逆よ

国からは急げ戻れの婦美が来て

御暇申して花の都へ ヤア順逆よ

庭 見 獅子籠
笛太鼓

大入羽 同断

片入羽 同断

桃之切 同断

われくは京で生れて伊勢育ち

腰にさいたは伊勢の御抜よな

思ひもよらぬに朝霧がおりて

そこで女獅子をかきされたよな

こなたも男獅子あなたも男獅子

心あはせ尋ねめされよ

奥山の澤の出口で女獅子をば

何んとかくしても尋ね出さばよ

あれ見さへな女獅子男獅子のふり見

さいなよれつほぐれつ余念ないもの

乱 舞 獅子籠
笛太鼓

久留里登満和連く伊勢編笠能

輪廻如九與奈

太鼓乃胴遠起里々止志免天

佐々羅越颯登壽利登女多譽南

岡 崎 獅子籠
笛太鼓

合貳拾壹座

右八七日之間浄身之上執行可致者也

四 組 織

十六歳から七十五歳ぐらいと年齢は幅広く、中学校を卒業すると仲間に入れた。以前は羽場で生まれた家の長男だけであつたが、最近は人も少なくなり、家をついでいるものなら誰でもよい。

伝習方法としては、祭りの十日程前に、寄りあい、獅子役、ささら、小太鼓などの役を決める。稽古は、寄り合いの次の日から始め、一週間程連日行う。新しくやる者は、先輩の所へ行き、挨拶をしておく。稽古は、先輩のやるのを真似ておぼえる。

獅子舞保存会があり、上羽場四五く四六軒、下羽場二〇軒、下新田五〇軒程が入っている。

保存会長 田村五十権 いそ

五 由 来

獅子舞七社由来

此郷に有来獅子舞の根元を委しく尋るに、むかし足利將軍十二代義晴御治世天文二年癸巳五月伊勢国産れ夫婦連にて此所に来り、今の女林にて行暮宿を乞ふといへども、農業最中なれば宿かす者なく、漸一字の堂を借りて一夜を明しけるに、不思議なるかな、夜明かたより男の腰たたず頻に苦しむ體なれば、女房も肝を潰し驚

くといへども詮術なく、甚心勞しける。兎角する内近所寄り比體を見て不便に思ひ、医者よ薬と様々いたわると雖も、更に験なければ、兩人も立得ず、四五日を経れども猶重病してなかなか唯事ならず、近所の者も其儘に指置がたく、右の段庄屋方へ音信ければ、当番のもの立会て問試するに、二人共嚴美の相有左ながら袖乞する者とも見へねば、其方達何故の浪人と尋ねければ、女日御尋御尤に存まする、箇様に御世話様になりまする我々、何をか包み申すべき、生国は伊勢仔細有て二人共国を追はれ野もなし。纔の着替も売代なし遣ひ果して此さま、剩へ箇様な病氣、あなた様方の御世話、如何なる報いか因縁か御推量下されと泪交りに語りける。して名は何と言ふ、女答て連合は才八私はたと申まする。尤国元にては、神職の私共、能くくの縁でこそつらい旅路をいたしますと、奥底もなく申けり。役人等も委細見届け、先づ病人平癒するまでは、心置なく滞留せよと、近所のもの粗末なき様申付、我屋々へ立帰り。飯米や塩味の類思ひ思ひに送り、又見聞ものも一合半饒を施し、何不自由なしといへども、病氣は一向心よからず。たかも詮方つきて急度思案し、是からは信心の外方便なしと、身を懲らし精進して、此所の産神山王宮へ、一七日火の物断にて丑の刻参りの祈誓をかけ、人目忍ぶの夜詣は男勝りの女ぞと後にぞ思ひ知られける。己に七日に満ずる夜は宵より出て神前に丹誠をこらして真言を唱へ頓て丑みつと思ふ頃、眠りを催しけるに白髪の老翁示現して曰く、我はこれ山王権現なり、汝才八が病氣を救はんと誓心を立る事の不便納受して、才八が病氣直ちに平癒さすべし、汝等再び国に帰る事なかれ、予が氏子と為て永く広前の草砂を踏むべし、就中才八が覚えある獅子舞氏子に伝置、年々祭祀に修行さすべし。亦来年夏の頃より諸国一統疫癘流行べし。予又諸天の力を乞うて疫神を悉除さすべし。此事村長共に披露し、必ず疑ことなかれと、告給ふと等しく目覚て驚き奇異の思ひをなし、寔にあり難き御告なりと、夜の明るを待兼ね飛が如く立帰り、才八に斯様々々の御告なりと、逸々語りければ、才八も手を合せ三拝するを見て、それこなさんは腰が立たと云はれてびつくり又驚き、是は是はと立つ居つ嬉しさあまり有難泪袖をも絞る計りなり。やがて病氣平癒を隣り隣りへ知らすれば、庄屋へも披露して、追々見舞群集して、産神へ丑の刻詣、獅子舞の事又来夏頃より疫癘の事細やかに語りければ人々奇異の思ひをなし、女の貞心又神の御告、彼是不思議の事共と感ぜぬもの

こそなかりけれ。兎角する内秋も暮冬に近付き世渡りも、人の情有りがたや、細き煙りの立ち所一度国へ帰るさも、枳穀の垣を結び廻し爰の住所となりぬるも、神の導く言の葉を、捨所なき身の上と夫婦諸共手を組て、思案の体ぞ道理なる。去る程に其年も暮れ、翌天文三年癸卯正月に至り、才八も役元へ願入、獅子舞稽古の由申入れれば皆々尤と同じて、若者共を選び出し稽古始りければ、珍らしき事に思ひて見物市をなす。誰か戯れにか伝津く舞といふ。

伝津くかさ才八けておたんぼう昼は

獅子舞夜はしじまい

去る程に日数積りて伝授し、自作に獅子の三頭を彫工し諸具を調べ、愈々四月中の申の日に興行せり。是則た才八が根本也。然るに神の御告の如く六月の頃より諸国一統の疫病にて死するもの数ふるに違あらず。然れども氏子にては一人も煩ふものなし。弥鎮守を尊崇し、亦獅子舞を賞美し、天文二年より文政十二年まで、凡二百九十七年相続しけるも偏に神の恵みに仍る、永久相続たるべし。扱又た人も山王権現の神子に補任し、名を丹波と改む。是神子の根本の獅子舞の由来荒増し処爰に出すもの也。

文政十二巳丑年記す

六 記録文献

「日枝神社開創と獅子舞由来」 文政十二年

「獅子舞歌」 昭和四十七年

七 特色・所見

おたに才八という伊勢生まれの夫婦が伝えたといわれる獅子舞、伝わる獅子頭は古色豊かな貴重なものである。

獅子舞元祖の碑、由来の示される副碑誌などにその歴史が伝えられ、北毛への旅芸人の原点をこの芸能に見るようである。

(原沢 宣也)

(写真・金井 竹徳)



氏子総代の人達が獅子を迎えに行くところ



勢揃いして神社に向う役員と獅子舞の人達



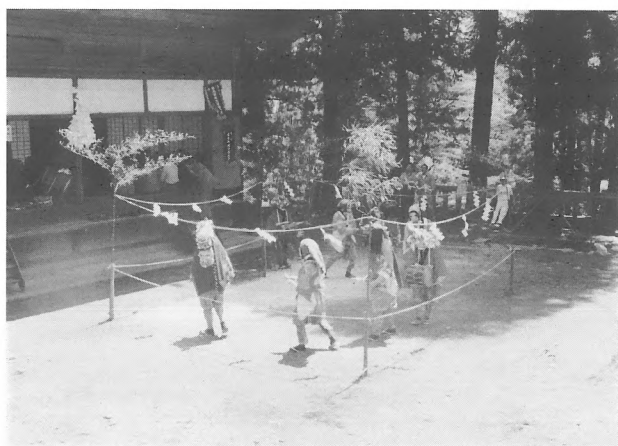
猿田彦大神を先頭に神社へ向うお囃子の人達と獅子たち



日枝神社をまわり庭に揃ったところ



初吉利 ささらはなし。幣束を持って舞う



仲吉利を舞う



獅子を追うささらを持つせこ



おたに才八の作った獅子頭

糸井吹張のナンマイダいといふっぱり（百万遍念仏、南無阿弥陀仏、ナーダ）

一 伝承地

利根郡昭和村糸井吹張地区に伝わる。吹張は、赤城山北西麓に位置し、片品川を境に沼田市と接し、周辺にできた河岸段丘は見事であり、地区内に役場があり村の中心地域となっている。

二 行事の時期及び場所

行事は大正末の頃は、養蚕の上簇が終わった六月下旬頃一週間かけて行った。実施の時には常会長に許可をもらった。戦後も一週間ほどかけたが、結願日けつがん（最終日）が日曜日になるように計画した。現在では、三日間しかやらないので結願日が日曜日になるようにするために金曜日から始める。日を決定するのは親方である。平成八年は親方が行事をする三日前に決めた。

吹張地区全戸を回り、庭先でナンマイダを唱える。大正末は五〇戸ほどであったが、現在では一〇〇戸を回る。

三 行事の次第・構成・芸態等

(1) 行事全体の次第 蚕の供養（養蚕への感謝）・はやり病予防・悪霊払いを願う。大正末は、最初の日に集会場に集まり準備をした。片品川の河原の方から「ナンマイダ」を唱えながら回る。夕食後も回り夜十時頃までかけ、最後に集会場にもどる。これを初日から五日目まで続け、六日目は、ボンゼン（ボンデン）を持った子が「明日は結願だよ」と言いながら回った。最終日は、夜中の二時から回り始め、朝十時頃に終わる。奉賀金（時には物）は最終日にもらう。現在では、初日と二日目は夕方から夜回る。道具類は途中の家に置き、二日目は道具を置いた家の近くから始める。結願日は日曜日になるので、朝四時から回り九時には終わるようにしている。初日は奉賀金をくれた家には、結願日は「ナンマイダ」だけする。奉賀金は六万円ほど集まる。集まった金は、沼田や村内の商店で親方と次年度親方になりそうなき

が日用雑貨品を買い、当日の午後に、皆で手分けしてお礼として配る。集めた金の六割ほどを礼として使い、残りの金は菓子を買ったり自分達で分配する。

(2) 役名 昔は親方を頭取と呼んだ。親方は奉賀金の帳簿つけや道具類の貸借、お礼の品物の購入、行事全体の指揮命令をする。ボンゼン持ちは一名、次年度親方になりそうなきがなる。鉦をかつぐのは二名、鉦たたき一名。残りの子は全員が数珠回しである。昔は高張提燈と手持ちの提燈があり持って歩いた。

(3) 道具 鉦・数珠・提燈を山後宅（大尽で祇園囃子の鉦、提燈、数珠などを保有していた）から親方が借りてきた。鉦は戦後買い替えた。鉦をかつぐ竹は、メンバーの家の竹を切って使った。長さ二三〇センチ、ボンゼンの竹の長さは二五〇センチ、その先に半紙四、五〇枚を使いボンゼンを作った。昔は自分達や大人に手助けしてもらった。現在は、大人が皆やってくれる。「百万遍奉唱」の版木があり、半紙に刷って奉賀金のお礼として戦前まで毎戸に配った。数珠は、直径二メートルでケヤキの玉が一〇八個付いている。道具類は三日間集会場に置いておく。ボンゼンは角田嵩三の祖父が竹とともに作ってくれた。行事が終わると処分する。他の道具は山後宅へお礼とともに返す。

(4) 芸態 大正末は、ボンゼン・鉦・提燈・数珠の順になり歩いた。親方が一番後ろから来た。家に着くと、ボンゼンが土間に入りお抜いをしながら「ナンマイダが来るよ」と家人に告げると、家人から「ごくろうさま」と返事があり、お抜いが始まる。次に鉦が入り、出口近くで待つ。その次に数珠が来て、ナンマイダを親方の合図で始め、数珠を持った子が五く六回「ナンマイダ、ナンマイダ」を繰返し数珠の内外の子が数珠を自分の手元にひき寄せる。この間にボンゼンは次の家に向かう。夕食後、また始め夜十時頃集会場にもどり一日が終わる。同様のことを五日目までくり返す。六日目は、ボンゼンを持った子が明日が結願であることを告げ、七日目は結願、集まった奉賀金を計算して親方と次年度親方になる子が沼田へ買物に出かけ、午後にはお返しをした。昭和三、四十年頃は「ナーダ、ナーダ」とも唱えていた。鉦が合図で終わるが土間で数珠回しはした。現在では、各戸の玄関に入ったボンゼンの子が、ボンゼンだけ家中に入れ「ナンマイダが来たよ。明後日（明日、今日）は結願だよ。奉賀をお願いします」と言う。ボンゼンを振る。鉦を親方がた

たいてから庭先で数珠回しが始まり「ナンマイダ、ナンマイダ」を十回ほど繰返し、終わりの合図で鉦をたたくと数珠回しの子ども達は「オー」と声を出し、数珠を上にあげ「ありがとうございます」と言い、ボンゼンの子は家人から奉賀金をもらい、親方に渡す。次の家へと向かう。行事の期間（一週間、三日間）は、毎日、毎戸を訪問した。

四 組織

大正末は、中学一年生から小学校へ入学した子全員が参加できた。そのため人数は五、六十人はいた。昭和三、四十年頃は中学校一年生から小学校四年生までで女子は入れなかった。それでも八十軒の家を二十人ほどで回った。現在では、中学一年生から小学四年生までである。中学一年生がいない時は、小学六年生が親方になる。平成八年度は次の通りである。（中学一年生がいなかった）

親方——六年生 一名 ボンゼン——六年生 二名

鉦かつぎ——五年生 二名 数珠回し——四年生、六年生 四名 合計男子九名

女子は入れない。四年間行事に参加するので毎戸の回る順については覚える。特別な練習はしないが、昔は最初の日に親方を中心にボンゼン、竹、提燈等の準備をした。

五 由来及び付近の類似芸能

始まりがいつの頃か定かではないが、江戸時代に始まったと考えられる。糸井地区内でも平成八年に次の地区で実施している。

○上糸井 六月二十四日（月）～三十日（日）一週間 鉦に文化八年とある。奉賀金入宝銭箱を使用している。男女混合で九名参加

○中宿 六月二十七日（木）～三十日（日）四日間

○中内出 六月二十七日（木）～三十日（日）四日間 男女混合で十二名参加

○宿 六月二十四日（月）～三十日（日）一週間

○常木 七月十一日（木）～十四日（日）四日間

現在では、すべて庭先でナンマイダをする。

他に同村椽久保北組では八月の盆の後に一週間「南無阿弥陀仏」を唱えながら回

り、最後の日に集落を二度回り阿弥陀堂へ集まる。鉦には明和二乙酉年とある。森下鎌沢では盆前に当番の家に集まり念仏を唱え供養する。永井でも秋、諸田を名のる家を念仏して回る。念仏は「南無阿弥陀仏」と六回をひとくぎりの単位で五十回する。念仏は中学三年生が最上級生で下は小学校一年生の男女混合で行う。一週間かけて一晚三戸ずつ回る。夕食後鉦と太鼓の合図で集まり各家の縁側から入り仏壇の前で始める。役名は、①数珠くり（数珠かぞえ）、②太鼓、③鉦がある。

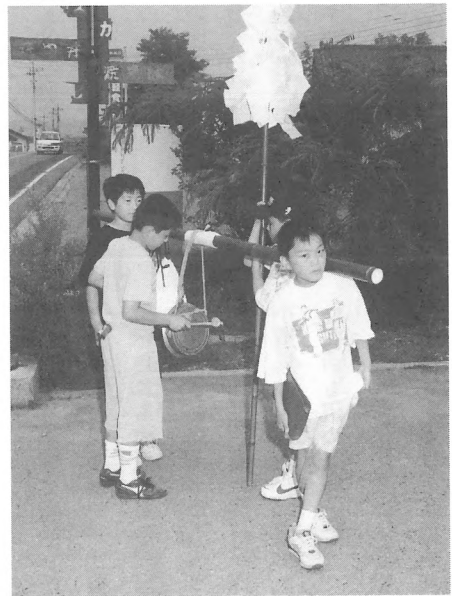
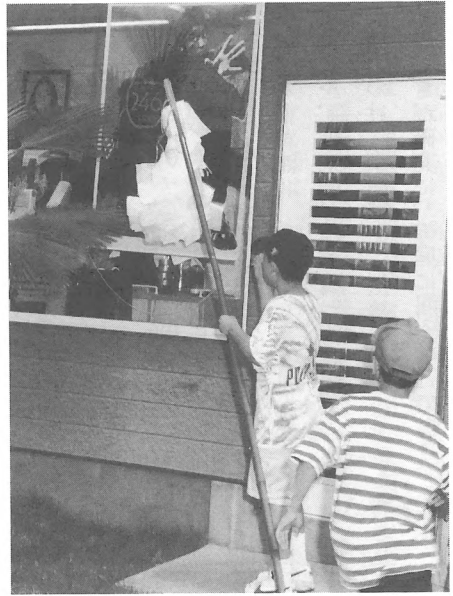
六 記録文献

なし

七 特色所見

昔は結願日まで一週間かけ、全戸を回ったが、現在では三日間となり家によっては宗教上の理由により拒否されることもあった。養蚕の上族後にやったことも現在では、まったく関係なくなってしまった。子供達だけで自主的にやる自治組織が存在している。今後、少子化がさらに進むと行事の形は変化していくことが考えられる。

（金井 庫治）



〔糸井吹張のナンマイダ〕